

平安京左京二条三坊四町跡
発掘調査報告書

2 0 2 0

株式会社 文化財サービス

例 言

- 1 本書は、京都市中京区西洞院通夷川下る薬師町 644・夷川通西洞院東入泉町 661-3 で実施した、平安京左京二条三坊四町跡の発掘調査報告書である。(京都市番号 19H538)
- 2 調査は、フジスペース株式会社より、株式会社文化財サービス(以下、「文化財サービス」という)に委託され実施した。現地調査は菅田薫が担当した。
- 3 調査期間は、令和2年5月8日～令和2年6月16日である。
- 4 調査面積は、150.5 m²である。
- 5 図1で使用した地図は京都市発行の都市計画基本図(縮尺1:2,500)「聚楽廻」を調整して作成した。
- 6 本文・図中の方角・座標は世界測地系による。標高は、T.P.(東京湾平均海面高度)である。
- 7 土層名及び出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 8 本書の執筆は菅田が行い、編集は野地ますみが行った。
- 9 遺跡の写真撮影は菅田が行った。出土遺物の撮影は写房楠華堂に依頼した。
- 10 調査に係る資料は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 11 発掘調査及び整理事業の参加者は、下記の通りである。
〔発掘調査〕 上田智也 小林一浩 田中慎一 中 優作 望月麻佑 吉岡創平(以上、文化財サービス) 作業員(株式会社京カンリ)
〔整理事業〕 赤羽 香 上野恵己 内牧明彦 神野いくみ 甲田春奈 塩地宏行 多賀摩耶 野地ますみ 溝川珠樹 望月麻佑 森下直子 吉川絵里 若山美帆
(以上、文化財サービス)
- 12 出土遺物の年代観は、平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要』第12号 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2020年に依った。
- 13 調査検証委員は、龍谷大学 國下多美樹教授、京都産業大学 鈴木久男教授に依頼した。
- 14 出土玉の分析については龍谷大学北野信彦教授に依頼し、玉稿を賜った。

目次

第I章 調査の経緯

- (1) 調査に至る経緯 1
- (2) 調査の経過 1

第II章 位置と環境

- (1) 位置と環境 5
- (2) 既往の調査 5

第III章 調査成果

- (1) 基本層序 6
- (2) 遺構の概要 6
- (3) A区 10
- (4) B区第3面 10
- (5) B区第2面 11
- (6) B区第1面 14

第IV章 遺物

- (1) 遺物の概要 16
- (2) 出土遺物 16

第V章 まとめ 23

附章 京都市内出土資料の分析調査（龍谷大学 北野信彦） 25

図版目次

- 図版1 遺構 1. A区 1面全景（南東から） 2. A区 2面全景（南東から）
3. A区 東壁断面（西から）
- 図版2 遺構 1. B区 1面全景（東から） 2. B区 1面 礎石建物SB72（東から）
3. B区 1面 防空壕SK36（東から）
- 図版3 遺構 1. B区 2面全景（東から） 2. B区 2面 礎石建物SB73（北から）
- 図版4 遺構 1. B区 3面全景（東から） 2. B区 西洞院川SD24南壁（北から）
3. B区 西洞院川SD24西壁（東から）
- 図版5 遺構 1. B区 土坑SK66（北から） 2. B区 溝SD69（南から）
3. B区 土坑SK59（南から）

図版 6	遺物	1. 土坑SK59	2. 溝SD69
図版 7	遺物	1. 土坑SK66	2. 西洞院川SD24
図版 8	遺物	1. 井戸SE 1	2. 西洞院川SD24
		3. 西洞院川SD24、土坑SK66	
		4. 土坑SK34、2層、第1面掘下げ	

挿図目次

図 1	調査位置図 (1 : 2,500)	1
図 2	調査位置図 2	2
図 3	調査経過写真	3
図 4	調査割付図 (1 : 200)	4
図 5	B区北壁・西壁断面図 (1 : 80)	7
図 6	A区平面・東壁断面図 (1 : 100)	8
図 7	B区第3面平面図 (1 : 80)	9
図 8	土坑SK59、溝SD69平面・断面図 (1 : 40)	10
図 9	土坑SK66平面図 (1 : 40)	10
図 10	土坑SK66、溝SD69断面図 (1 : 40)	11
図 11	B区第2面平面図 (1 : 80)	12
図 12	B区第2面P51、建物SB73平面・断面図 (1 : 40)	13
図 13	B区第2面P50、建物SB74平面・断面図 (1 : 40)	14
図 14	B区第1面建物SB72、P18・19平面・断面図 (1 : 40)	14
図 15	B区第1面平面図 (1 : 80)	15
図 16	遺物実測図 1 (1 : 4)	18
図 17	遺物実測図 2 (1 : 4、1 : 2、1 : 6)	19
図 18	遺物実装図 3 (1 : 4、1 : 1)	20
図 19	西洞院川の位置 (1 : 2,000)	21

表目次

表 1	遺構概要表	6
表 2	遺物概要表	16
表 3	遺物計測表	23

第 I 章 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

調査地は、京都市中京区西洞院通夷川下る薬師町・夷川通西洞院東入泉町に所在する。民間開発に先立つ発掘調査である。

対象地は平安京左京二条三坊四町にあたり、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下文化財保護課）により包蔵地確認（試掘）調査が先行しておこなわれた。その結果、敷地西側で西洞院川とみられる堆積が確認できたことから文化財保護課は発掘調査を指導した。

発掘調査は、開発事業者であるフジスペース株式会社より文化財サービスに委託され実施した。

(2) 調査の経過

調査は、2020年5月8日から資機材搬入、水道敷設などの付帯工事を開始。その後、調査範囲の縄張りを行い文化財保護課の臨検を受け、5月11日から重機掘削を開始した。

当初、試掘調査の結果から西洞院川を主目的として南北10m、東西15mの調査区を設定する

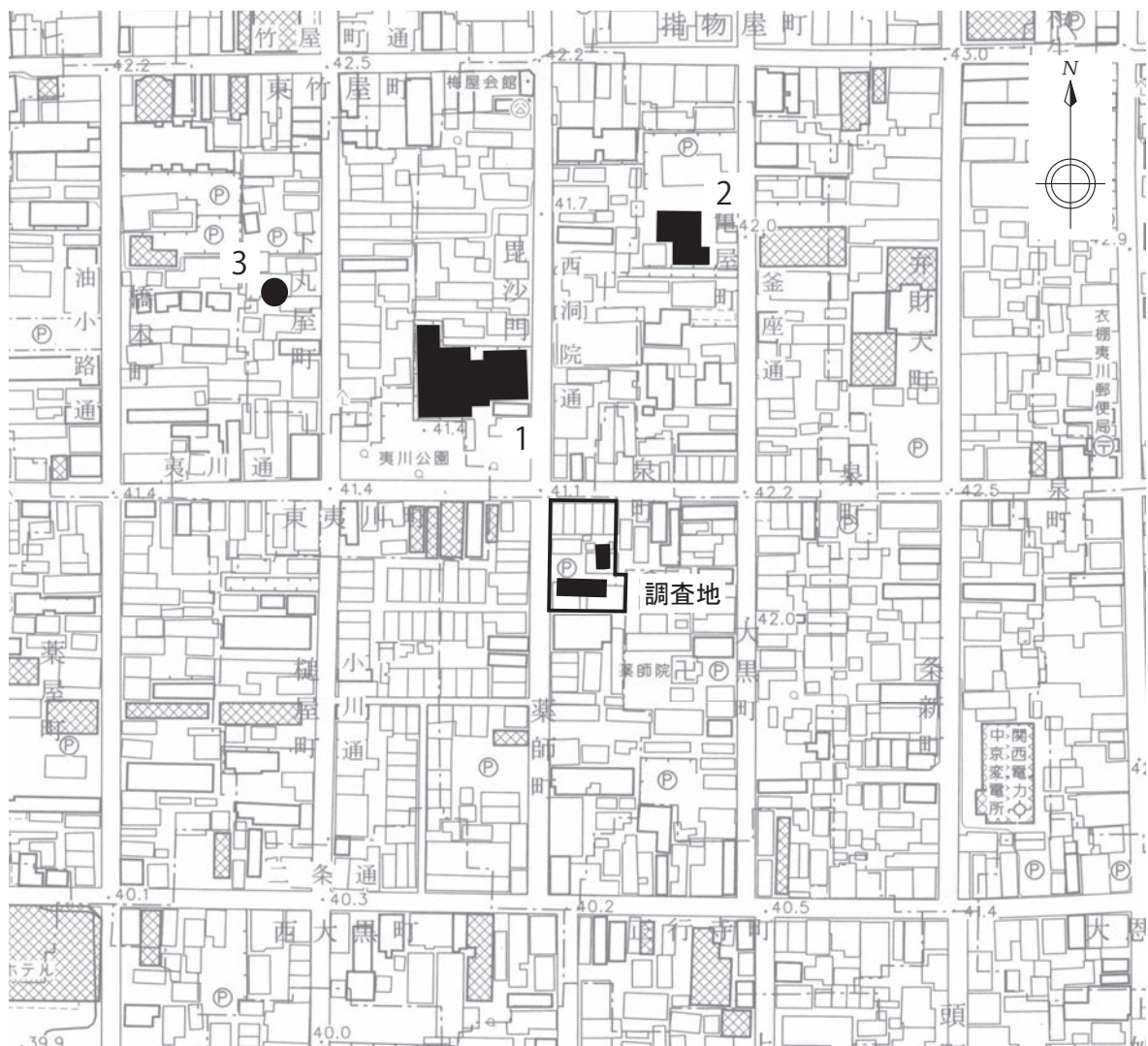


図1 調査位置図1 (1:2,500)

予定であったが、調査区北側にガス・上水道が埋設されていたことから当該範囲（南北 3.5 m、東西 15 m）を除き新たに保護課試掘 3 区を拡張する形で調査区を設け A 区とした。排土置き場を確保するために A 区（8 × 5 m・40 m²）を先行して調査をおこなった。埋め戻したのちに B 区（6.5 × 17 m・110.5 m²）の調査を実施した。

調査全般を通じて各遺構面での遺構検出や完掘時に文化財保護課の検査を受けた。また龍谷大学園下多美樹教授、京都産業大学鈴木久男教授には外部検証委員として適宜検証していただき適切なご指導をいただいた。

本来であれば、調査成果を市民に公表すべく現地説明会を開催するところではあったが、コロナ禍という世情から中止した。

測量基準点の設置と地区割り（図 4）

測量基準点は、VRS 測量により調査区の中央に S. 1、東に S. 2 の 2 点設置し、その 2 点からトータルステーションにより S. 3 を設置した。基準点測量の成果は、以下のとおりである。

S. 1	X=-109,289.234m	Y=-22,345.350m	H=41.250m
S. 2	X=-109,272.923m	Y=-22,346.179m	H=41.453m
S. 3	X=-109,288.122m	Y=-22,332.502m	H=41.426m

検出した遺構実測および遺物取り上げの単位とするために、測量成果に基づき 3 m 四方のグリッドを設定した。地区名は X 軸、Y 軸の北西交点の下三桁の数字で呼称した。例えば P48 は X293、Y341 と地区名を記した。また包含層掘削においても 3 m グリッドで遺物の取り上げを行った。記録作業は、手測りによる実測と写真測量を併用し図面を作成した。写真は 35 mm フルサイズのデジタル一眼レフカメラ、35 mm モノクロフィルム、35 mm カラーリバーサルフィルムを使用し撮影した。

整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業及び報告書作成を行った。整理作業は、写真・図面の整理と出土遺物の整理を並行して行った。遺物の整理は、洗浄、接合、実測、トレース、復元、写真撮影を行った後、報告書の執筆及び編集作業を行い、報告書を作成した。執筆は調査を担当した菅田 薫が、編集作業は野地ますみが担当し、その他整理業務は当社社員が分担して行った。遺物写真の撮影は、写房楠華堂に依頼した。

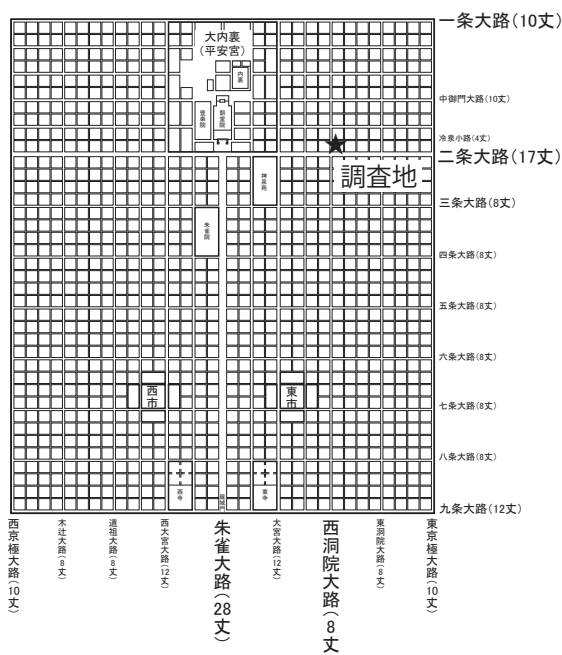


図 2 調査位置図 2



1. 調査前（南西から）



2. 重機掘削



3. 作業風景



4. 基準点測量



5. 文化財保護課の臨検



6. 国下検証委員の視察



7. 埋戻しと転圧作業



8. 埋戻し終了後（南西から）

図3 調査経過写真

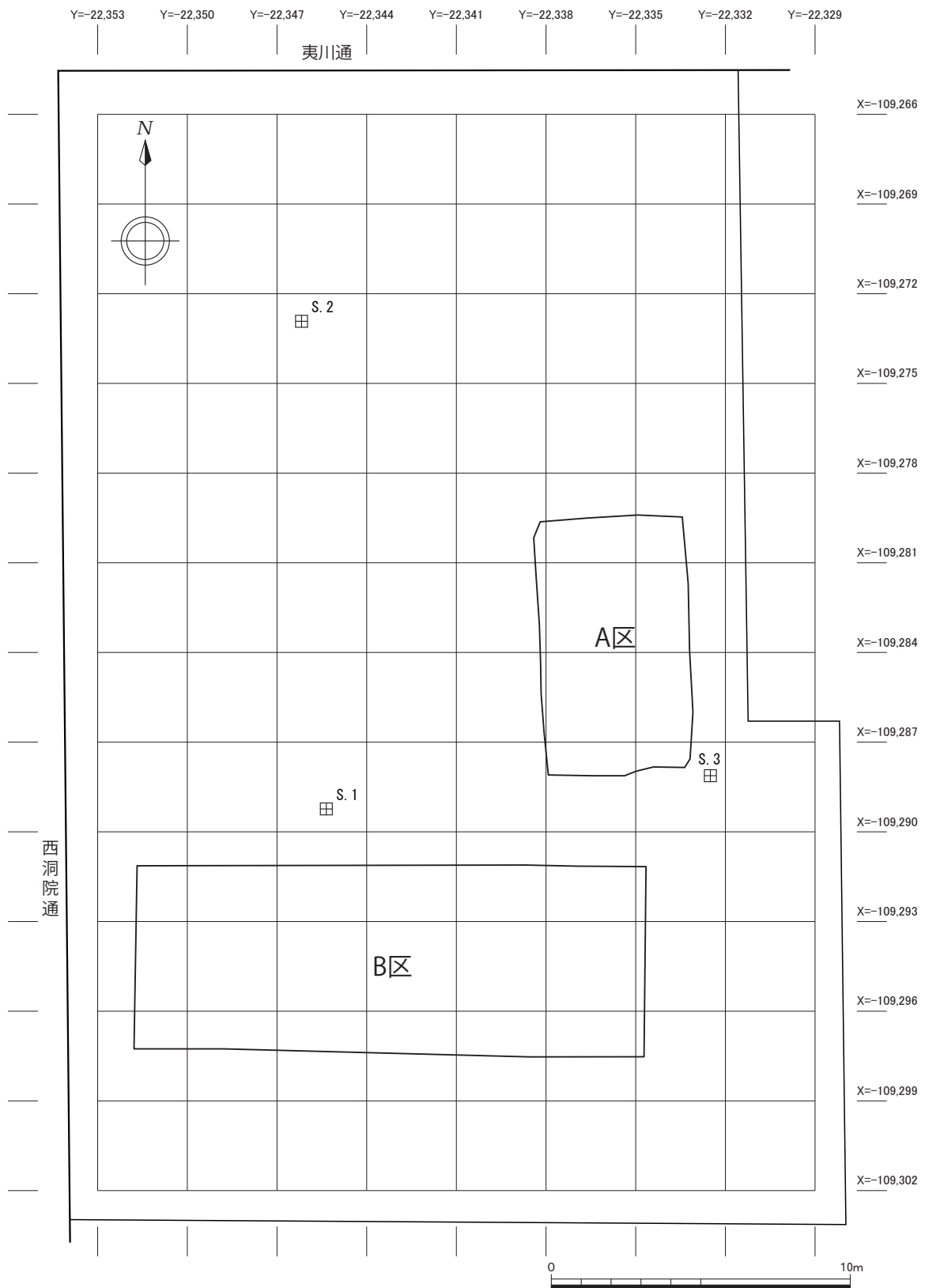


図4 調査割付図 (1 : 200)

第Ⅱ章 位置と環境

(1) 位置と環境

調査地は西洞院通と夷川通の交差点東南角にあたり、敷地全体の現況はコインパーキング及び町屋である。平安京の条坊では、左京二条三坊四町にあたり、調査地の西側は西洞院大路東側の路面・側溝・築地が推定される。

調査地の西側は、平安時代には西洞院大路を挟み南北二町を占める陽成院があり、その北西には四町を占地する高陽院があった。また南には東三条殿、閑院などが推定されている。

桃山時代には、豊臣秀吉により天正地割がおこなわれ、西洞院大路と油小路の間に小川通、東側の町尻小路との間に釜座通が通り、平安時代とは大きく景観が変わる。同じように慶長年間には当地の西に徳川家康によって二条城が築かれることにより付近には多くの武家屋敷が構成される。しかし当地付近は町衆の移住地であり、近隣の町名に残る指物屋町の指物屋、竹屋町の竹屋などの商家が立地し、調査地の夷川通を挟んだ北側では今でも京秤座の特権商人であった「神家」が存在している。

当地の南東には町名にもなる医徳山薬師院が存在する。寺伝によれば、ご本尊は延暦元年（782）最澄の作による薬師如来像で美濃国の寺院にあったものを、織田信長が請来したと伝えられる寺院である。1688年黄檗山の僧鉄面寂鍊禅師により再興され（坊目誌）、最盛期には西洞院に面し正門が開かれ大黒町一帯に境内を有していた。薬市が開かれ、現在も薬師町・薬屋町の名を残している。蛤御門の変で焼失したが1889年に裏門にあたる釜座通を正門にして再興され現在に至っている。

(2) 既往の調査

今回調査を実施した四町では、これまでに発掘調査は実施されていない。西に接する二坊十三町、北に接する三坊三町でも発掘調査は行われていない。北西の町、二坊十四町で1982年に実施され^{註1}（図1-1）、平安時代前半の井戸・土坑・溝状遺構、室町時代の井戸・土坑・溝状遺構等を検出している。これらの中で、調査区の東拡張区で検出した溝状遺構7は、室町時代後半に埋没したとされ、西洞院川に関連する遺構の可能性があるとしている。また同じ町内の立会調査で平安時代中期の包含層を検出している^{註2}（図1-3）。

ほかには、三坊三町の立会調査で室町時代と江戸時代前期の包含層が検出され、江戸時代前期の包含層から金箔瓦が出土している^{註3}（図1-2）

註

註1 平安京調査会「6 左京二条二坊（4）」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年

註2 京都市文化財保護課『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成26年度』京都市文化市民局 2014年

註3 吉本健吾「IV-1 金箔瓦」『京都市内遺跡立会調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2007年

第三章 調査成果

(1) 基本層序 (図5・6)

調査地全体に0.8～1.2mの整地・盛土層がある。この整地土は調査地南半から東側では大量の焼土・漆喰・瓦を主にした層であり、A区ではほぼ遺構面直上にまで達している。また北側は碎石を大量に入れて整地している。整地土に含まれる焼土・漆喰層には近代の棧瓦やガラスが含まれる。

A区は整地・盛土層直下が遺構面になる。第1面がA区9層2.5Y3/2黒褐色泥砂上面、第2面が無遺物層とみられるA区14層2.5Y5/4黄褐色砂礫層である。1面・2面とも時期差はなく遺構面であるA区9層2.5Y3/2黒褐色泥砂層からの出土遺物も今回の調査では確認できなかった。

B区ではB区5層2.5Y4/2暗灰黄色泥砂層上面で第1面、この層を除去するとB区6層2.5Y5/3黄褐色泥砂層、7層2.5Y5/2暗灰黄色泥砂層、15層10YR4/2灰黄褐色泥砂層、16層7.5YR3/4暗褐色泥砂層があり第2面の遺構面となる。6・7層は、西洞院川旧河道のSD24上面での整地層であり、15・16層も整地層である。これらの整地層からの出土遺物は少ないが、中世末から近世初頭とみられる。第3面は、15層10YR4/2灰黄褐色泥砂層、16層7.5YR3/4暗褐色泥砂層を除去した18層2.5Y7/1灰白色微砂層面で遺構を検出した。19層も整地層とみられ平安時代中期の遺物を少量包含する。

(2) 遺構の概要

表1 遺構概要表

検出した遺構の総数：75

検出面	時期	主な検出遺構
1面	江戸時代以降	柱穴 礎石建物 土坑 井戸
2面	室町時代	土坑 河川(西洞院川)
3面	平安時代中期から後期	土坑 溝 整地層

A区；井戸・土坑などを検出した。2面で検出を行い、記録作業をおこなったが、1・2面の検出遺構の時期差はないとみられ、江戸時代終末から近代に比定できる遺構である。

B区；3面の調査を行った。第1面で礎石建物になるとみられる礎石および土坑など、第2面で礎石建物。第3面で土坑・溝などを調査した。1・2面の建物跡とした遺構はともに柱間が0.5m～0.55mと狭くまた、攪乱などで規模も明確でないこともあり建物となるか不明であるが、並ぶ礎石列を建物とした。また、1面土坑SK35・36は、調査前の町屋に伴う構造物であり、解体時に建具などを廃棄して埋められていたことから攪乱として掘り下げた。そのためSK35は重機掘

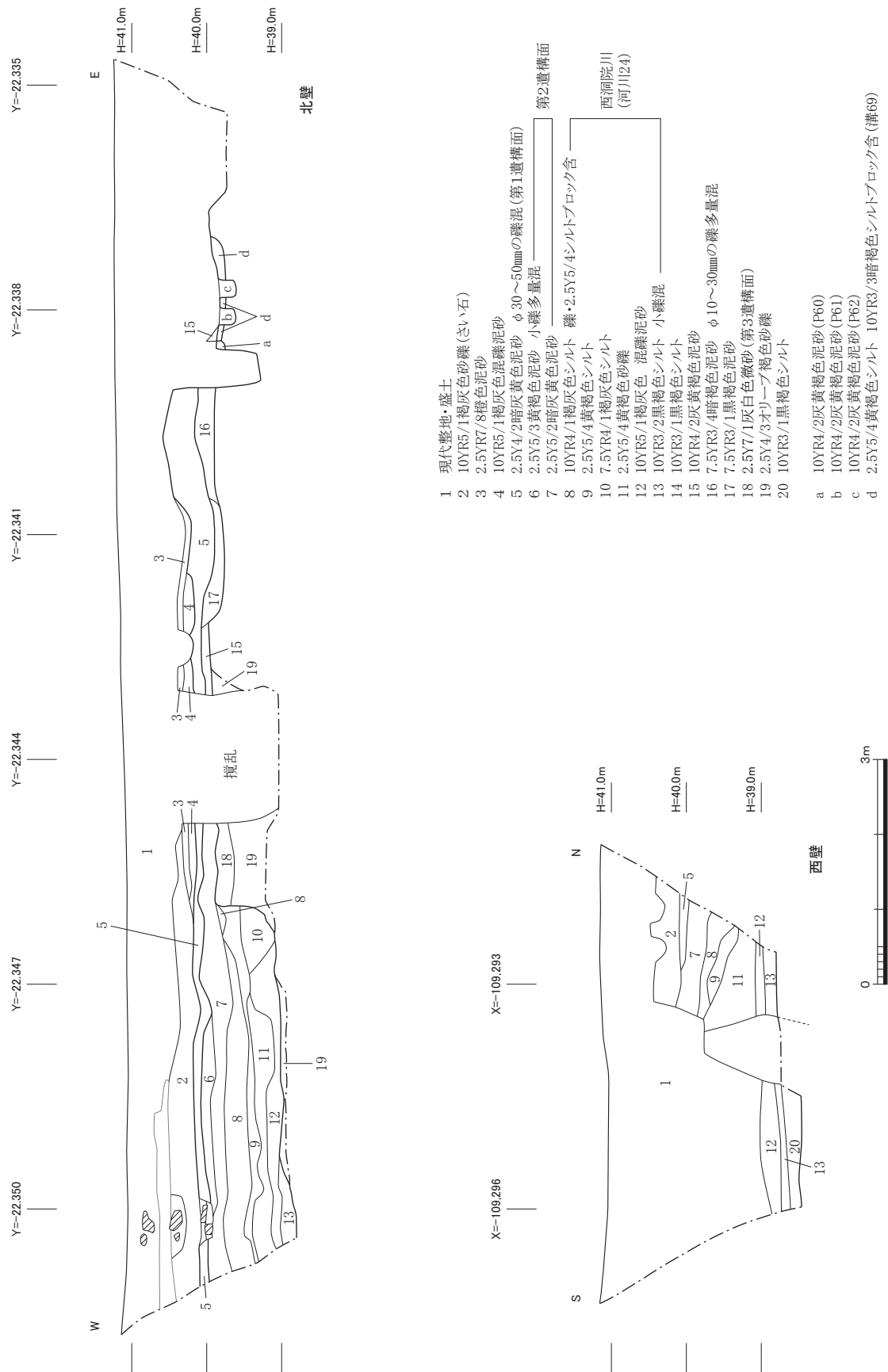
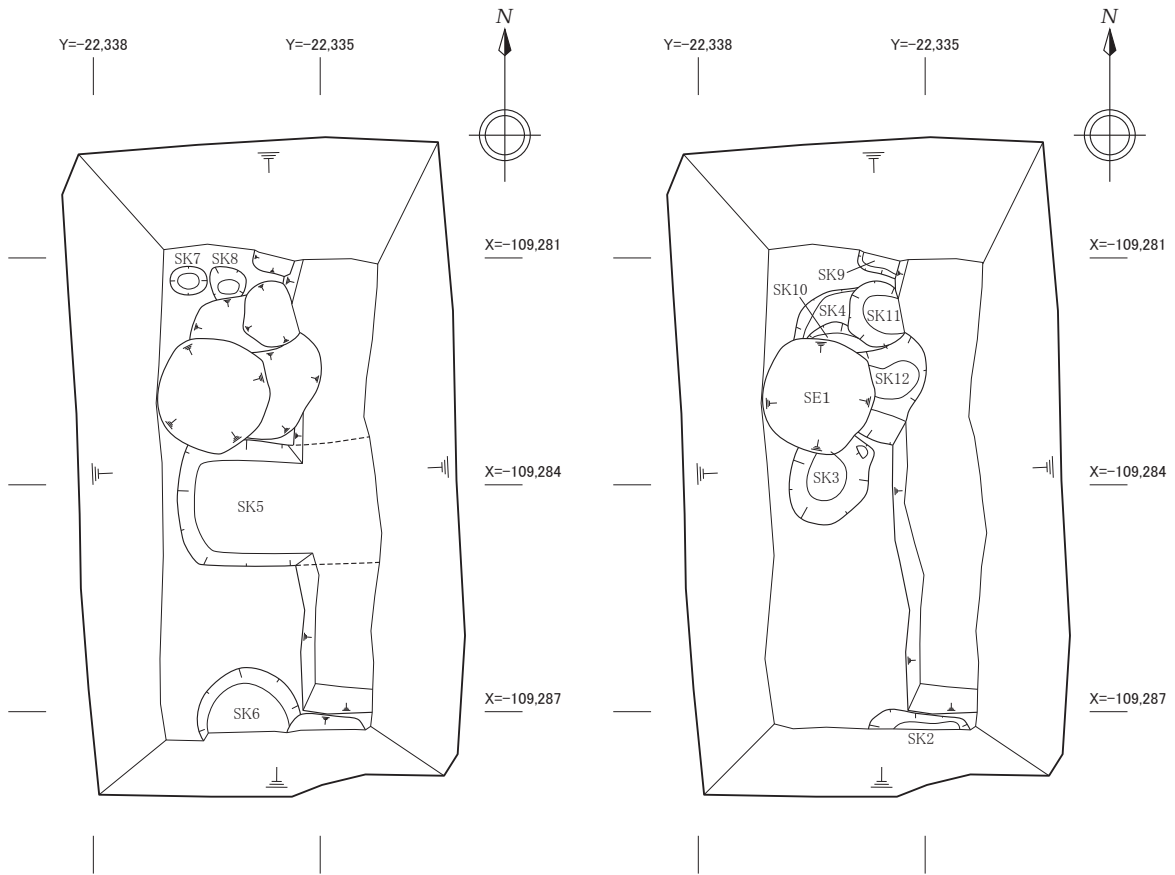


図5 B区北壁・西壁断面図(1:80)



- 1 現代整地土
- 2 瓦しつゝい層
- 3 2.5Y7/2暗灰黄色泥砂 こぶし大の礫多量混
- 4 2.5Y7/6明黄褐色砂泥 (壁地層)
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色褐色 こぶし大の礫多量混
- 6 10YR5/3こぶし黄褐色泥砂
- 7 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂

- 8 2.5Y6/1黄灰色砂礫
- 9 2.5Y3/2黒褐色泥砂小礫
- 10 2.5Y6/2灰黄色シルト
- 11 10YR3/2黒褐色泥砂
- 12 2.5Y5/4黄褐色砂礫
- 13 2.5Y4/3オリーブ褐色砂礫 (地山)

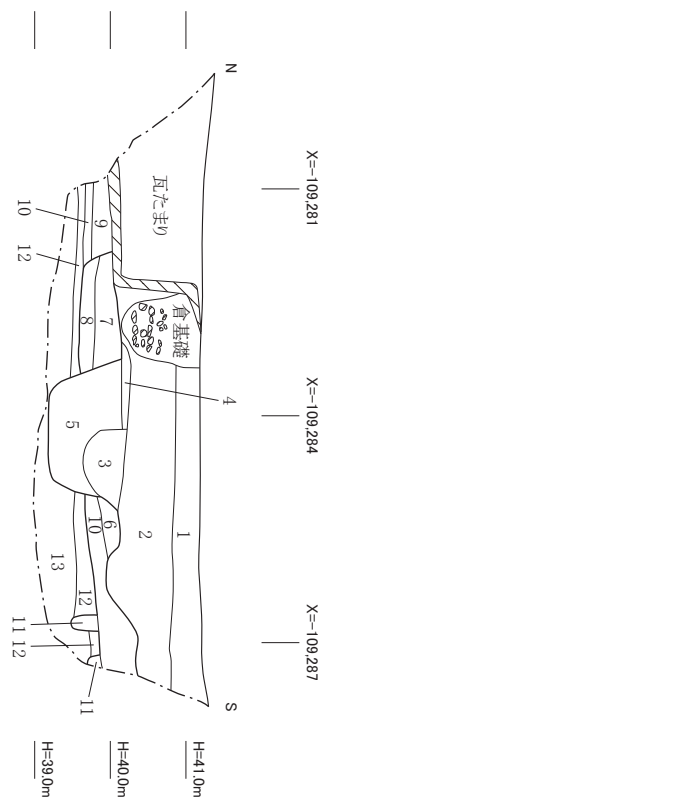


図6 A区平面・東壁断面図 (1:100)

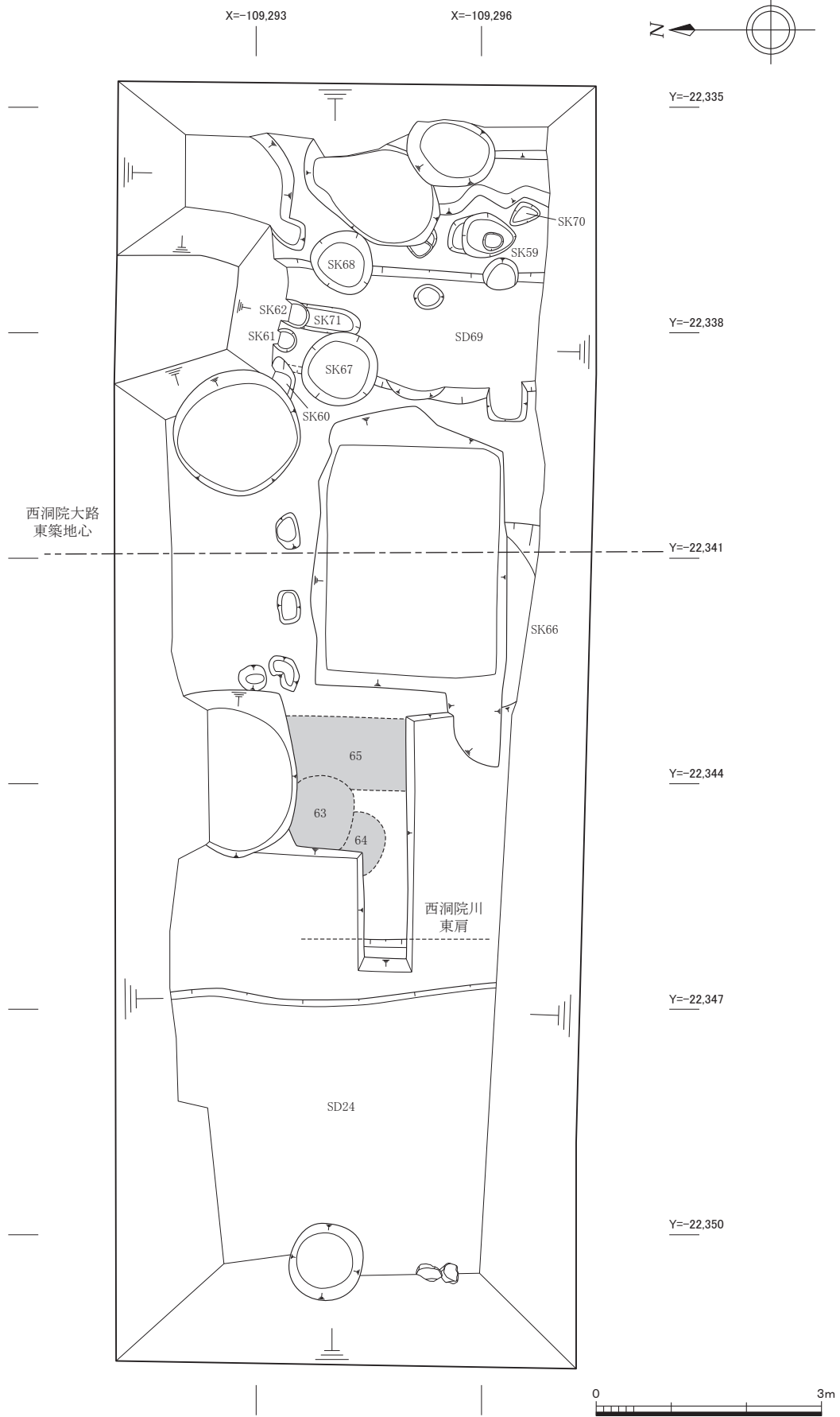
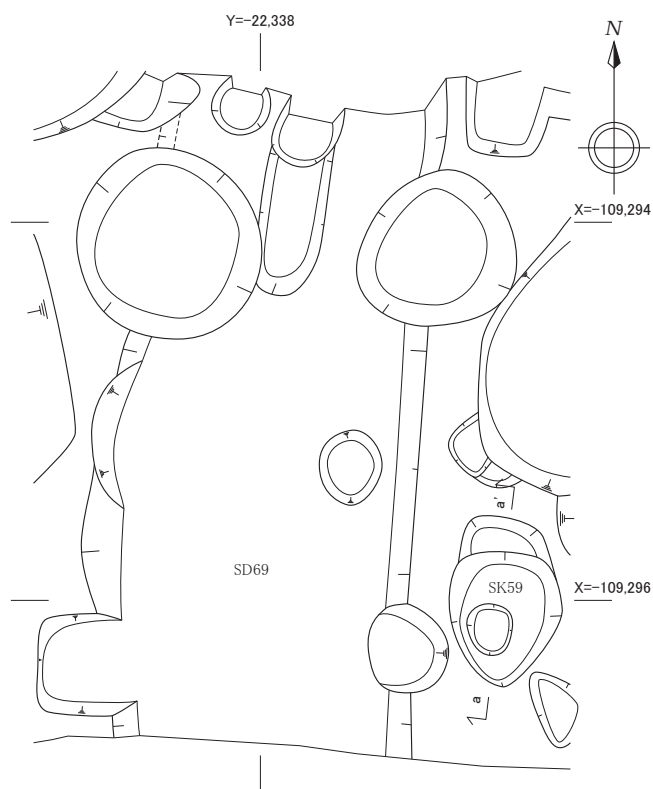


图7 B区第3面平面图 (1 : 80)

削時に漆喰も除去した。その後、元居住者の方から「この町屋には各戸に防空壕が作られ、戦後は、倉庫として使用していた」というお話を得ることができた。類例は不明であるが、とりあえず防空壕として、記録にとどめた。3面の遺構は、平安時代中期から後期。1・2面の遺構は安土桃山から江戸時代初期にあてられる。

なお、西洞院川旧河道SD24は、1面または2面で検出出来たはずであるが、後世の遺構・攪乱などで肩口の検出は3面の検出時になったため、平面図は第3面の図に記録した。



(3) A区 (図6 図版1)

井戸SE1 直径1.00mを測る。井戸枠は瓦を組んだ井筒である。井筒内埋土は灰黄褐色泥砂層である。焼塩壺・焼塩壺蓋・土師器皿などが出土した。土師器は、13期である。

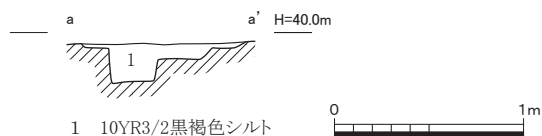


図8 土坑SK59、溝SD69平面・断面図 (1:40)

(4) B区第3面

整地層 (図7) 図7のSK63～65は、検出時土坑として調査を行ったが掘削した結果浅い窪地に堆積した整地層と判断した。南壁にみられる9層10YR7/4にぶい黄橙色粘質土・11層10YR3/3暗褐色泥砂と同様の堆積土である。出土遺物は細片であるが、土師器口縁端部の特徴などから3期～5期ものである。

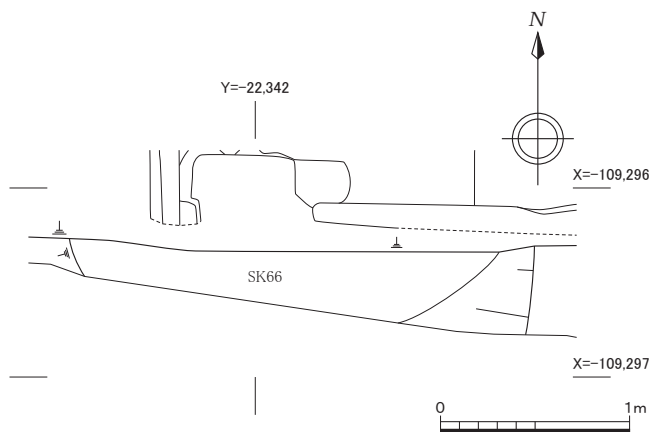


図9 土坑SK66平面図 (1:40)

土坑SK59 (図7・8 図版5-3) 長径0.7m、短径0.6mの不定形な平面形を呈す土坑。深さ約0.3mを測る。埋土は黒褐色シルト層である。平安時代中期の土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器などが出土した。

溝SD69 (図7・8・10 図版4-1・5-2) 溝の西肩口は、想定西洞院大路東築地心から約2.1mの位置で検出した。幅4.5m、深さ約0.2mあり、埋土は黄褐色シルトと暗褐色シルトの

混土である。平安時代後期の土師器・須恵器・緑釉陶器・白磁などが出土した。

土坑 SK66 (図7・9・10 図版4-1・5-2) 大半が調査区外に延びるのと、攪乱に壊されているため規模は不明であるが、東西2.45m以上、深さ0.55mを測る。検出位置は、西洞院大路東築地心に想定される位置で検出した。底面は平坦ではなく凹凸がある。埋土は褐色シルト層の単層で径0.3～0.5m程度の礫が混ざる。平安時代後期から鎌倉時代の土師器・緑釉陶器・軒平瓦などの遺物が出土した。

(5) B区第2面

西洞院川 SD24 (図7 図版4) 調査区の西端で検出した。東肩は、近代の土坑 SK35 や攪乱などにより一部の検出にとどまった。南北3.8mを確認しており、西肩は検出していない。調査区南北の壁面観察での東肩部の深さは0.75mあり、底面は西に向傾斜を持っていることからさらに深くなるとみられ、西壁での埋土は1.1mの厚さがある。また、東肩部の護岸の痕跡は確認できなかった。埋土は褐色系のシルト層である。出土遺物は平安時代から江戸時代初期のものまでが上層から下層まで混在して出土している。鉛ガラスの丸玉が1点出土した。

建物 SB73 (図11・12 図版3) P38・39・47・48・51で構成される。0.2～0.5mの扁平な川原石を据えた建物。攪乱などにより規模は明らかではなく、北側南北柱列の柱間は0.5m等間で並ぶ。ほぼ座標軸に沿った方位を持っている。

建物 SB74 (図11・13 図版3) P43、49で東西に検出した。柱間は1.4m。建物 SB73 の北列と同一線上に並ぶ。建物 SB73 に比べ小振りの川原石を据えている。また P43 は深さ0.45mの掘方を持っている。埋土は黒色のシルト層である。この建物の礎石と南側2.8mの位置で検出している石を据える P50 は、西洞院川 SD24 を埋めて整地した後に成立している。

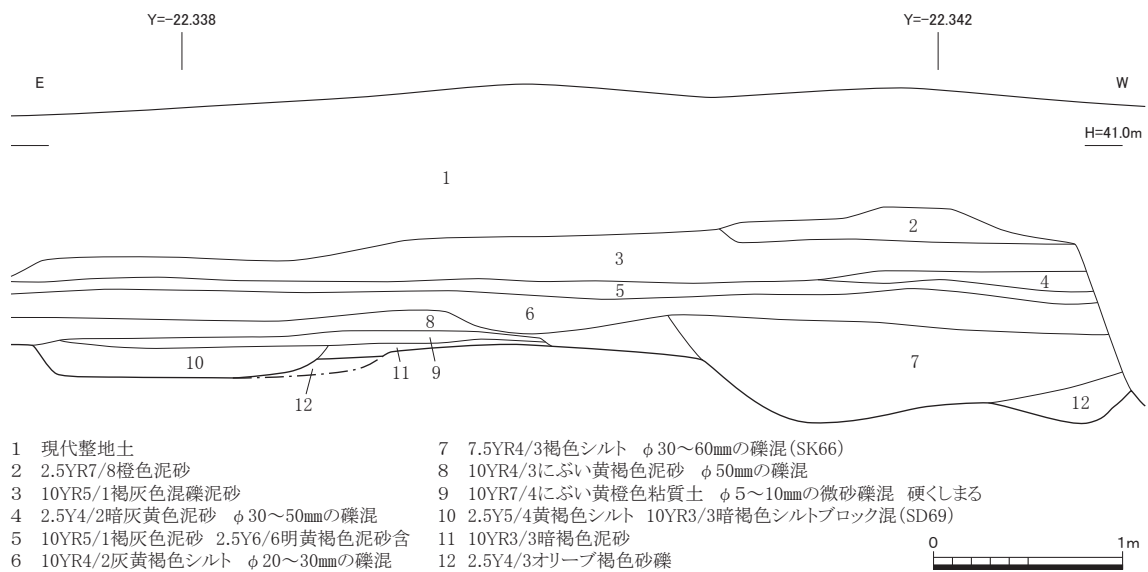


図10 土坑SK66、溝SD69断面図 (1:40)

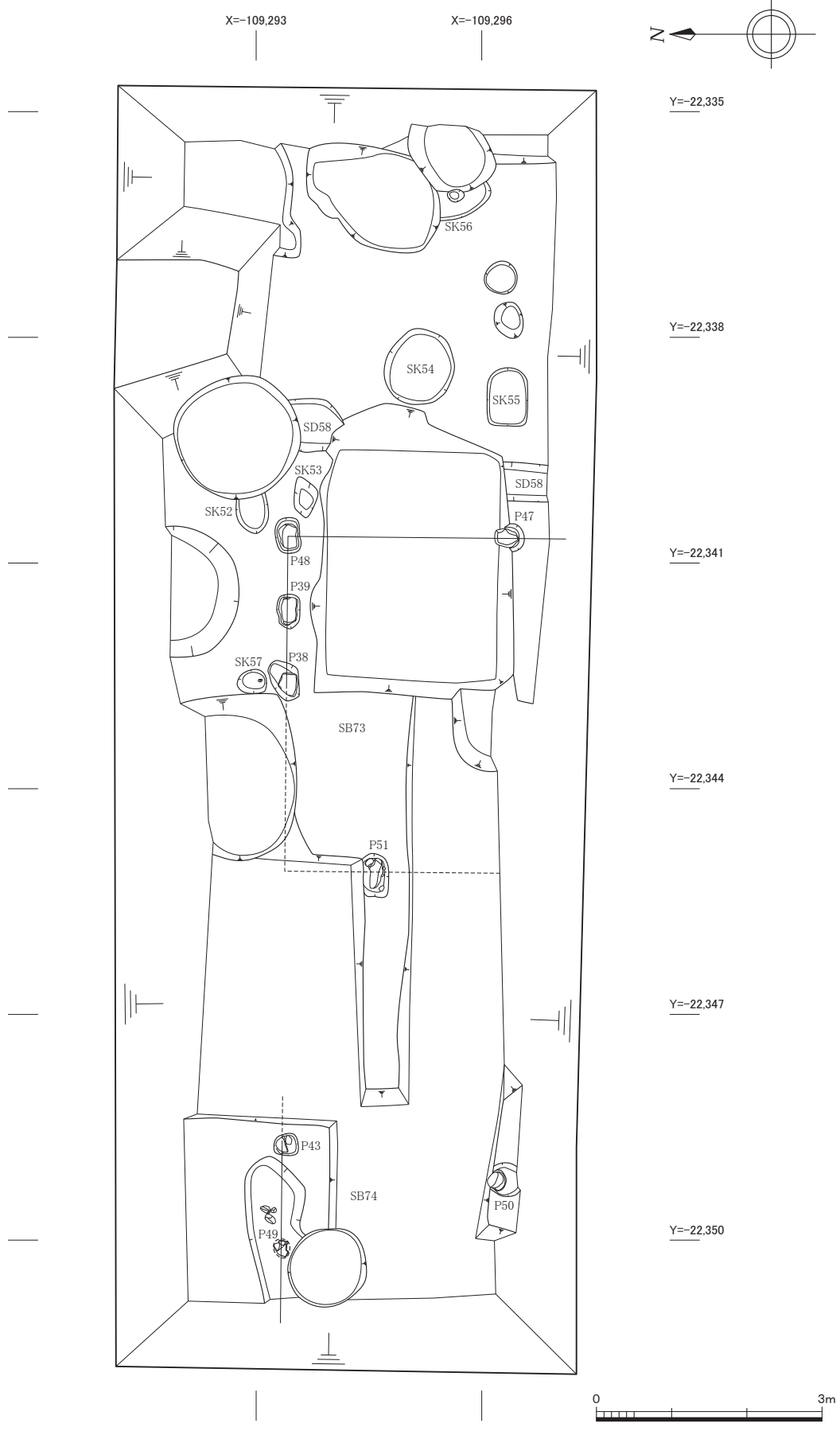


图 11 B区第2面平面图 (1 : 80)

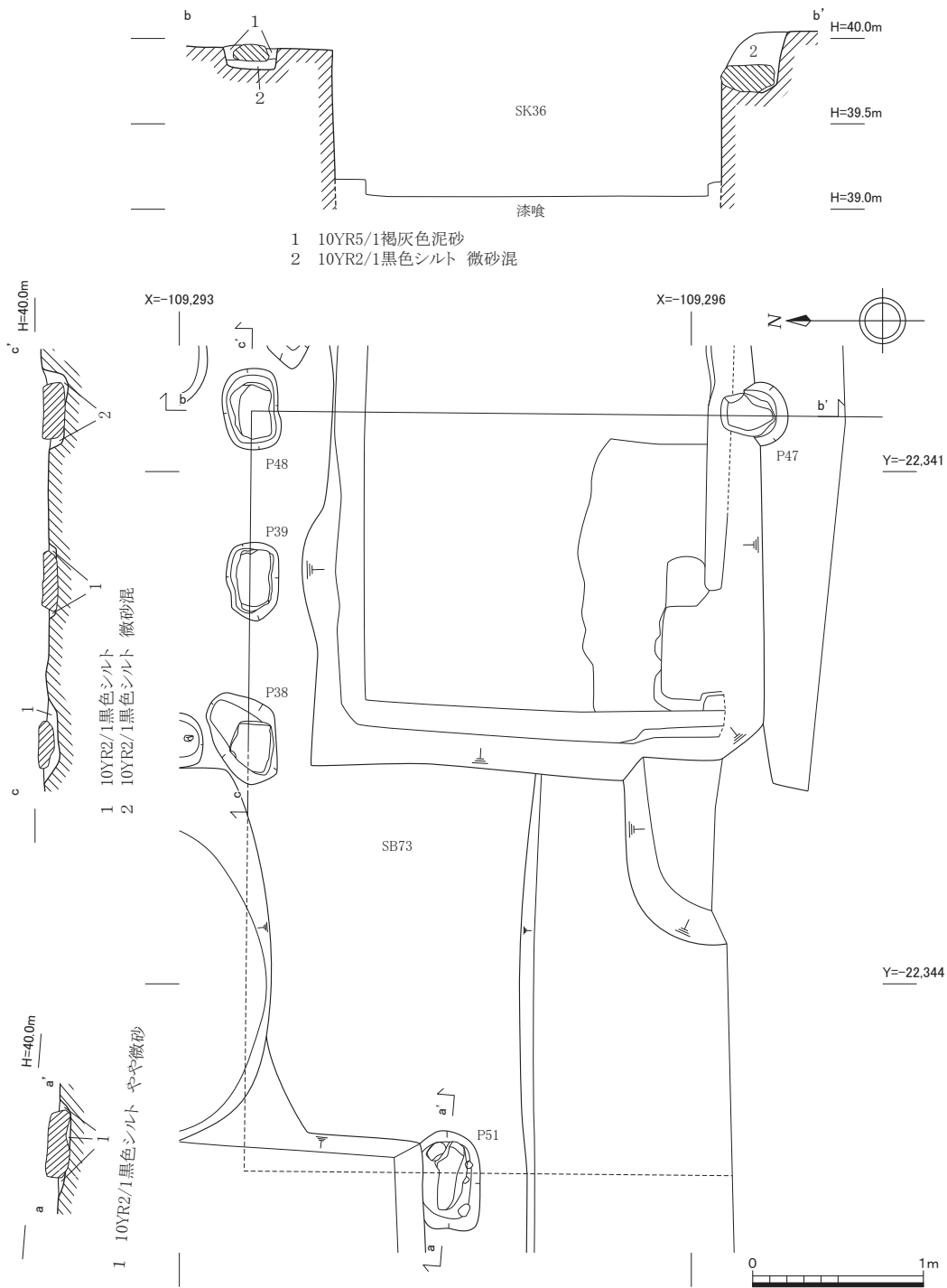


図12 B区第2面P51、建物SB73平面・断面図 (1 : 40)

(6) B区第1面

建物 SB72 (図 14・15 図版 2-1・2)

P18、19 など。攪乱と調査区外になるため規模は不明である。一辺 0.2 m ほどの扁平な石を据えた建物。P18 と P19 で 0.55m を測る。方位が東で約 8° 南に触れている。

土坑 SK35・36 (図 14 図版 2-3)

両遺構ともに漆喰で作られる。SK35 の掘方は長径約 3.6 m、短径 2.2 m、検出面からの深さ 2.1m ある。SK36 は長径 3.6 m、短径 2.4m の掘方で、厚さ約 0.2 m の漆喰で造る。内法は長径 2.7 m、短径 2.0m、深さ 2.1m ある。北東に直径 0.4m の穴がある。

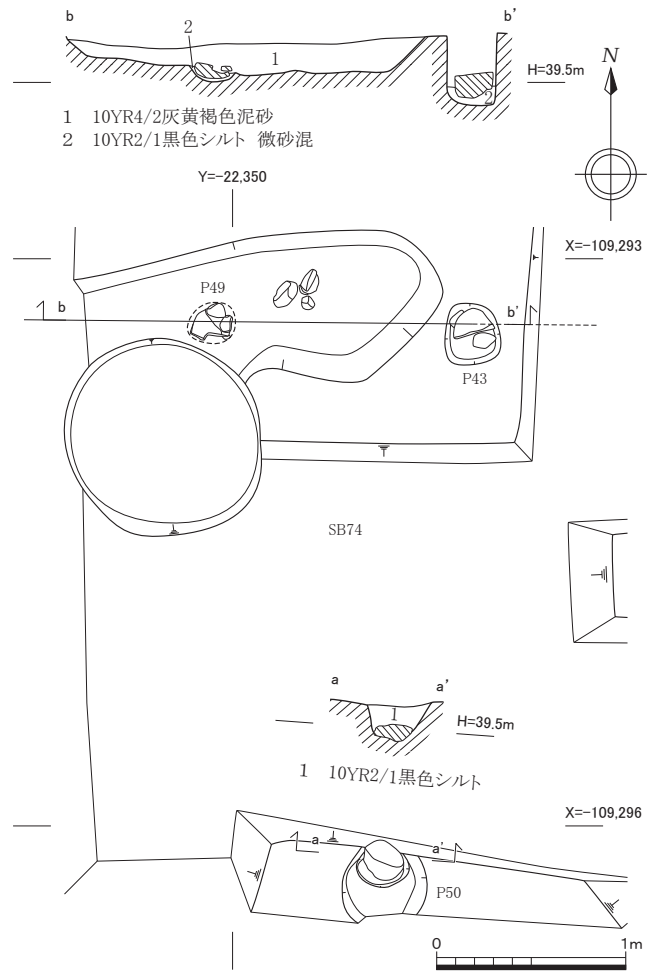


図 13 B区第2面P50、建物SB74平面・断面図 (1:40)

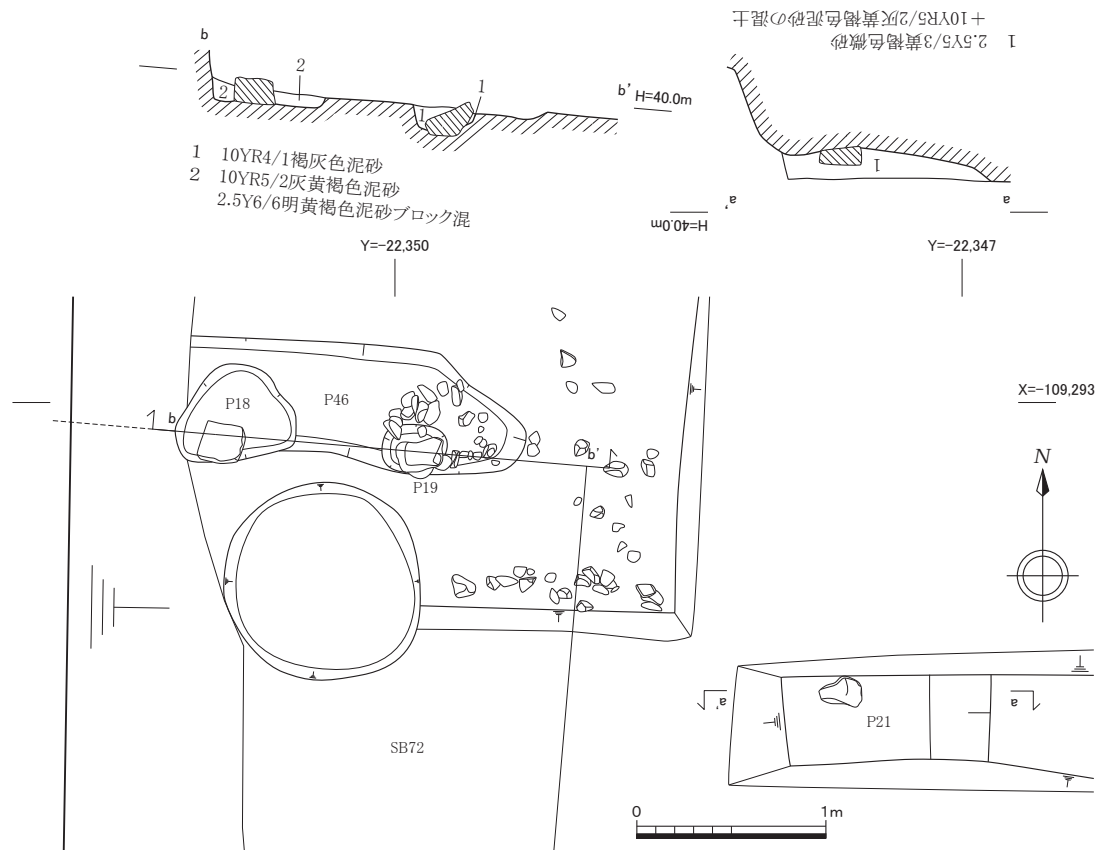


図 14 B区第1面建物SB72、P18・19平面・断面図 (1:40)

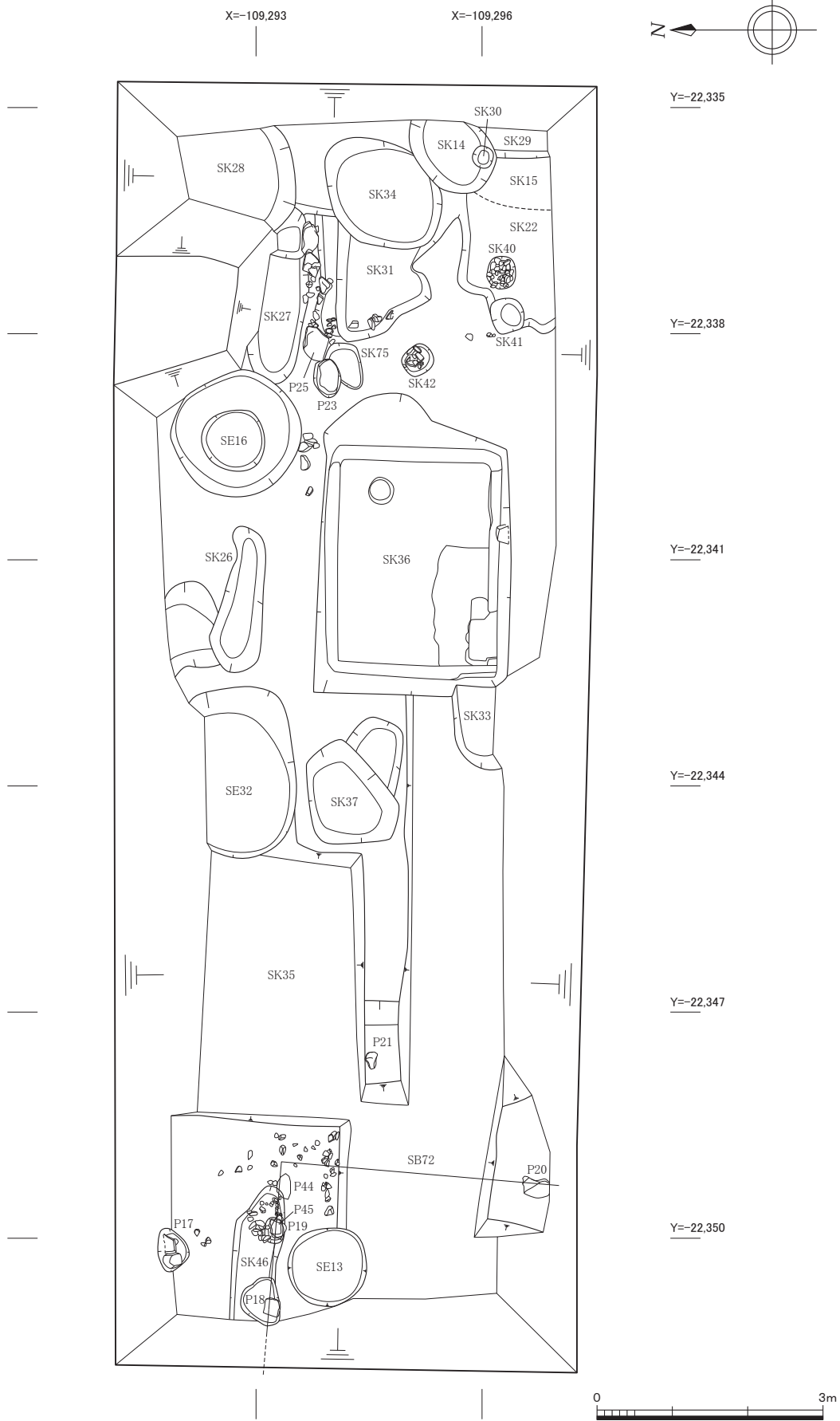


图15 B区第1面平面图 (1:80)

第Ⅳ章 遺物

(1) 遺物の概要

今回の調査では、遺物収納コンテナにして14箱出土した。土器類が大半を占め、金属製品・石製品は僅かに出土した。木製品の出土はない。遺物は平安時代中期から後期、室町時代から江戸時代初めと江戸時代後期以降の時期である。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	A ランク	B ランク	C ランク
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦		土師器 20 点、須恵器 3 点、黒色土器 1 点、白色土器 1 点、緑釉陶器 4 点、緑釉陶器素地 1 点、灰釉陶器 2 点、輸入陶磁器 2 点、瓦 1 点	白磁 2 点	
室町時代 ～ 江戸時代 初期	土師器、須恵器、瓦質土器、灰釉陶器、古瀬戸、輸入陶磁器、焼締陶器、瓦、石製品、ガラス製品		土師器 4 点、須恵器 3 点、瓦質土器 1 点、灰釉陶器 1 点、古瀬戸 1 点、輸入陶磁器 2 点、焼締陶器 1 点、瓦 1 点、石製品 1 点、ガラス玉 1 点		
江戸時代 以降	土師器、染付、焼締陶器、瓦、石製品、金属製品		土師器 10 点、石製品 3 点 金属製品 9 点		
合計		12 箱	3 箱 (73 点)	1 箱 (2 点)	8 箱

(2) 出土遺物

土坑SK59 (図16-1～10 図版6-1)

土師器 (1～4)、黒色土器 (5)、須恵器 (6)、緑釉陶器 (7・8)、灰釉陶器 (9・10) が出土した。土師器はすべて皿Nである。体部は緩やかに立ち上がり口縁部は外反し端部は上方に丸く肥厚する。3の口縁端部は外方に開く。1は口径13.7cm、器高2.1cm。2は口径13.8cm、器高2.3cm、3は口径13.9cm、器高2.5cm。4は口径13.9cm、器高2.7cmを測る。いずれも胎土には微細な石英・長石・チャート・雲母がみとめられ、焼成は良好である。5はB類の椀とみられる。体部外面にヘラミガキが認められる。6は鉢で口縁部は外側に丸く収める。7は素地とみられる貼付け高台の椀底部である。底部径6.9cm。8は皿である。底部径7.7cm。蛇の目高台で全面に深い緑色の釉が施されている。9は皿とみられる。比較的高い貼付け高台で底部径6.0cm。10はの瓶子とみられる体部片。胎土は密でオリーブ褐色の釉がかかる。出土した土師器は3C期頃とみられる。

溝SD69 (図16-11~18 図版6-2)

土師器 (11~13)、緑釉陶器 (14・15)、須恵器 (16)、輸入陶磁器 (17・18) がある。このほかに灰釉陶器、瓦、焼締陶器が出土しているが小片で図化できるものはなかった。焼締陶器はすり鉢片で混入と思われる。土師器は皿Nで11は口径9.6cm。端部が肥厚して立ち上がる。12は口径13.0cm、器高2.7cm。13は口径15.0cm、器高2.0cm。土師器はほかに皿Aの小片も出土している。14は底部内面に陰刻による花紋を施す。高台はケズリ出して底部外面も含めて淡い緑色の釉が施されている。底部径6.0cm。15も皿。底部径7.8cm。蛇の目高台で高台部まで施釉されている。16は鉢。口縁部は肥厚し、玉縁風に仕上げられている。口径18.4cm。17・18は白磁碗。玉縁の口縁部で17は口径15.0cm。土師器の時期は小破片が多いため詳細は不明であるが4~5期と思われる。

土坑SK66 (図16-19~34・図17-60 図版7-1)

土師器 (19~31)、緑釉陶器 (32)、須恵器 (33)、白色土器 (34)、瓦 (図17-60) がある。19・20は皿Acで19は口径8.2cm、器高1.2cm。20は口径9.1cm、器高1.1cm。21~24は皿Aで21が口径9.0~10.7cm、器高1.3~2.1cmを測る。25~31は皿Nで口径は9.2~15.6cm、器高1.5~3.3cmを測る。皿Nは、体部は弱い二段のナデで口縁端部もわずかに外反し、ほぼ直立に近い。32は碗底部。底部径は6.6cm、底部外面を除き施釉され、釉はオリーブ黒色を呈する。33は坏Bである。底部径13cmで貼付け高台。34は高坏脚部である。白色土器はこの1点だけが出土した。60 (図17) は唐草文軒平瓦とみられる。折り曲げ技法。瓦当部凹面ヨコケズリ。平瓦凹部布目。顎凸面ヨコ方向のナデ。平瓦凸面オサエナデ。土師器は5期とみられるが、軒平瓦は平安時代末から鎌倉時代か。

西洞院川SD24 (図16-35~48・図17-59・図18-73 図版7-1・8-1・2)

西洞院川SD24からは多くの遺物が出土したが小破片のものが多く図化できる遺物は出土量に比べて非常に少なかった。土師器 (35~38)、須恵器 (39~41)、灰釉陶器 (41)、輸入陶磁器 (43・45)、古瀬戸 (44)、焼締陶器 (46)、瓦質土器 (47) 石製品 (48) 瓦がある。35・36は土師器皿Shとともに口径6.3cm、器高1.6cmを測る所謂ヘソ皿である。37は皿Nである。口径8.0cm、器高1.4cm。38は皿Sである。口径12.0cm、器高2.3cm。39は蓋の宝珠である。40は鉢口縁部。口径30.0cmある。41は盤の脚部である。42は碗である。底部径7.0cm。44は古瀬戸の卸目皿。内面の卸目は線刻による。底部は糸切痕を残す。底部径4.5cm。灰オリーブ色の釉が施される。43は碗の底部で底部径4.9cm。45は碗。底部径5.6cm。見込み部分に刻印? 体部内外面に線刻による施文が施される。46はすり鉢である。底部径12.4cm。47は火鉢である。48は軽石である。穿孔の跡がみられることから浮きのようなものとして使用されていたと思われる。孔の推定直径4mm、重さ8gある。59 (図17-59) は軒丸瓦。小破片のため詳細は不明であるが、珠文が回る左巻きの巴紋と思われる。73 (図18-73) はガラス製丸玉。直径1.5~1.6cmの球形を呈する。ほぼ半分が残存する。破損した面で穿孔溝が確認できる。穿孔溝は現存で幅4mmで、重さは3.1gある。破損面も含め表面は全体が白い風化物質に覆われている。一部破損が生じたが、その破損面は深い緑色を呈している。鉛ガラスである (附章参照)。土師器は7C期とみられるが他の出土遺物は時期幅があり、45は17世紀、59軒丸瓦も同様の時期と思われる。

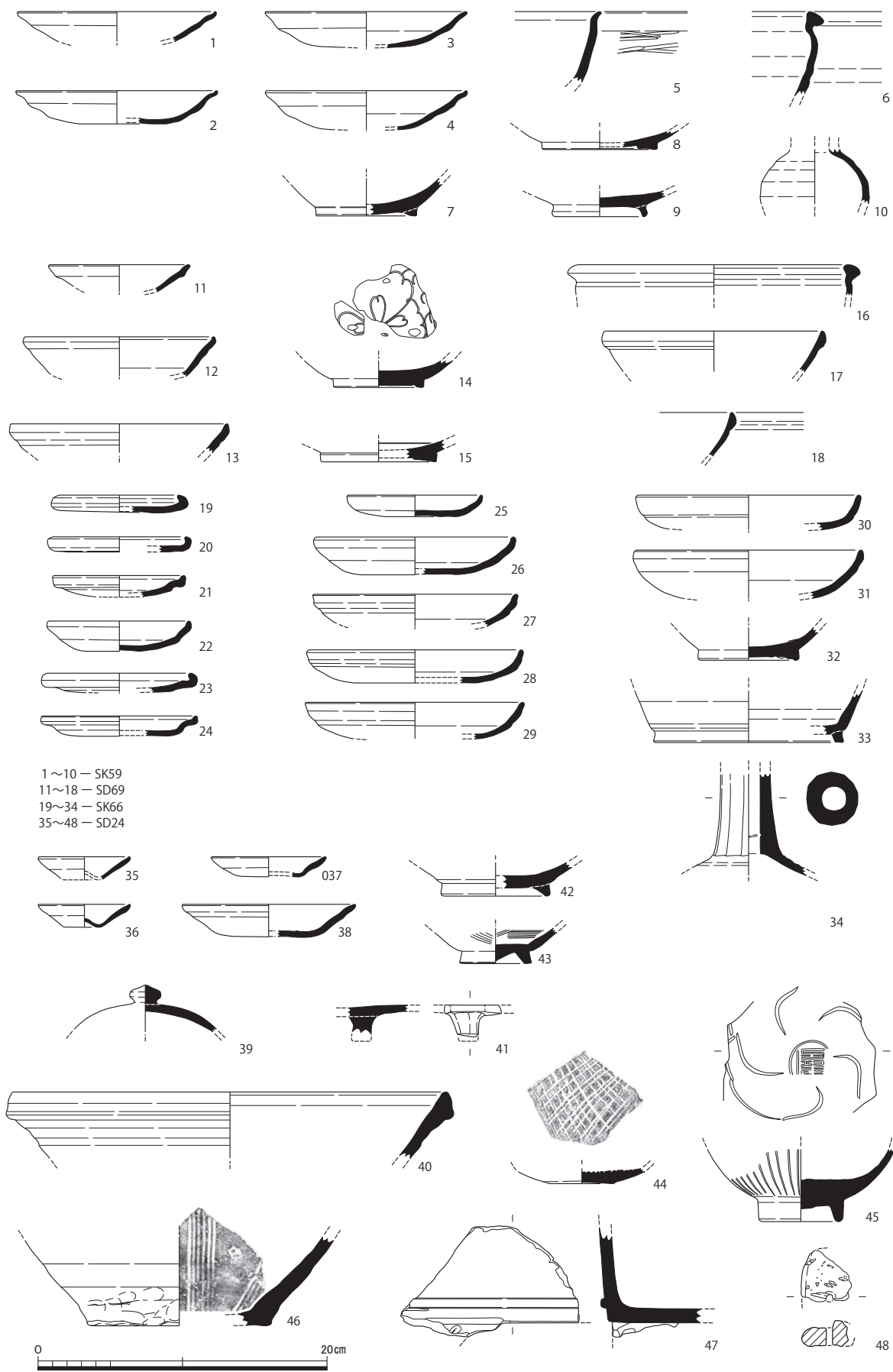


图16 出土遺物1 (1:4)

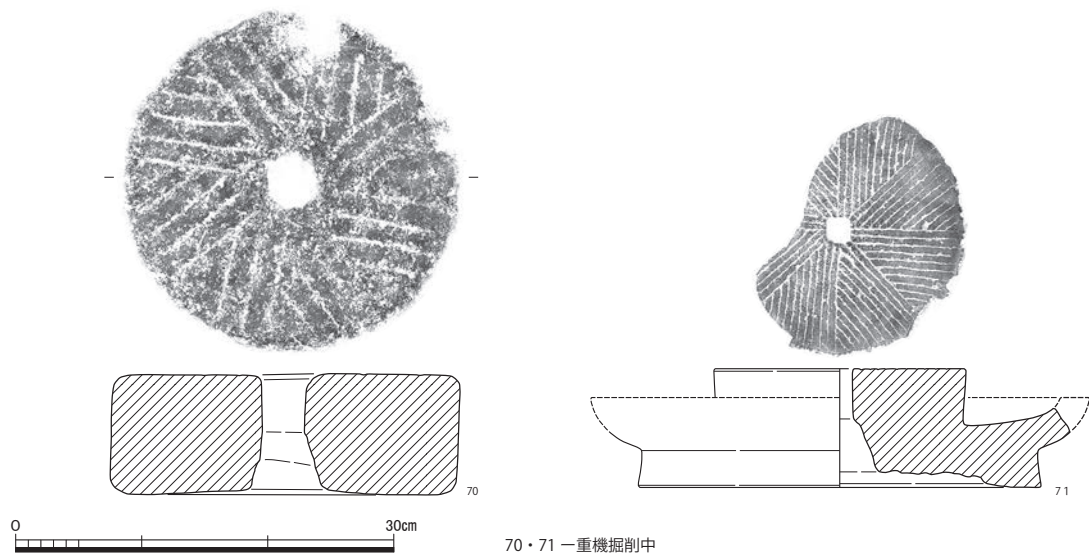
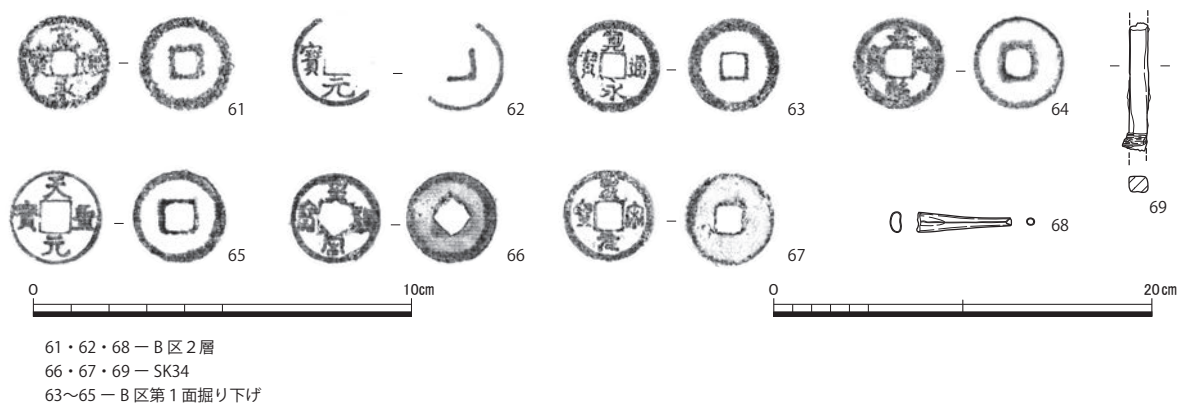
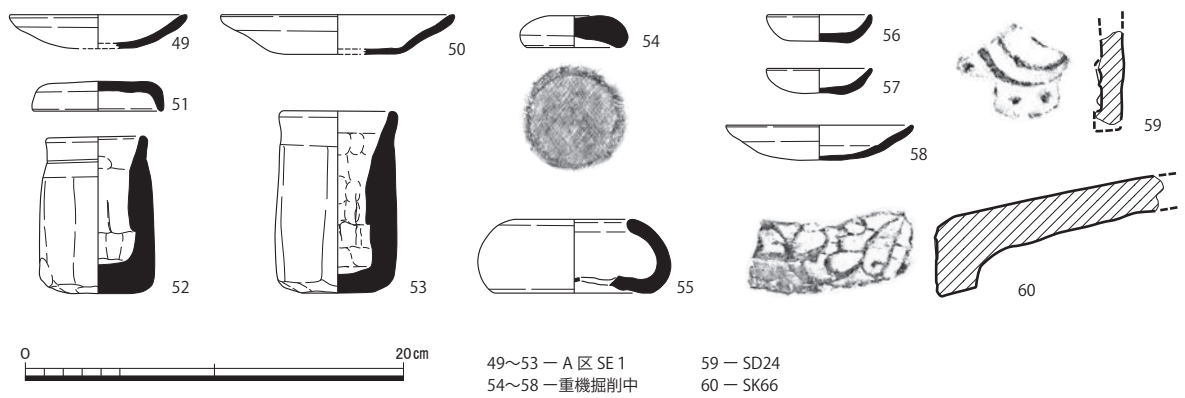


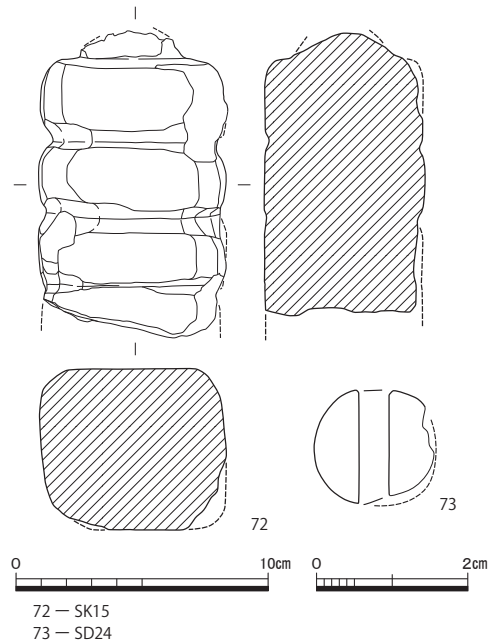
図17 出土遺物2 (1:4、1:2、1:6)

井戸SE1 (図17-49~53 図版8-1)

土師器(49~53)、井戸枠に使用した平瓦、施釉陶器、陶磁器などが出土した。49は皿Sbである。口径9.3cm、器高1.8cm。50は皿Sである。口径12.3cm、器高2.1cm。51は焼塩壺蓋である。口径6.8cm、器高1.6cm。口縁部はヨコのナデ、内面ナデ、外面オサエで丁寧に仕上げている。52・53は塩焼壺。52は口径5.0cm、器高8.4cm、底部径3.1cm。53は口径5.7cm、器高9.6cm、底部径3.6cm。ともに内面に布目絞痕、外面には板による圧痕を残す。土師器は11C期から12期と思われる。

その他 54~58(図17-54~58)は重機掘削中に採取した遺物。54~58は土師器である。54

焼塩壺蓋とみられる。は口径5.0cm、器高1.7cm。外面天井部は僅かに窪み、内面は布目痕を残す。焼塩壺蓋としたが異なる器形の可能性がある。55は鉢。口径6.2cm、底部径8.4cm、器高3.9cm。内面はロクロナデがみられるが外面は全体に剥離が著しく調整不明。胎土は浅黄色を呈し密である。56・57は皿Nである。口径はともに5.5cm、器高は56が1.5cm、57が1.4cm。58は皿Sbである。口径9.9cm、器高1.9cm。土師器は13A期にあたる。70・71（図17-70・71）は石臼でともに下臼である。70は径27.4cm、高さ9.6cm、白面での軸穴の径3.5cm、重さ13.8kgを測る。軸穴は白面のほぼ中心に穿たれる。白面は軸穴を中心に八分画3～5溝式で、主溝・副溝ともに白面周縁にまで達



72-SK15
73-SD24
図18 出土遺物3 (1:4、1:1)

している。石材は花崗岩である。71は茶臼の下臼。受け皿の端部は欠損しているため全体の径は不明である。白面の径20.0cm、受け皿の幅7.5cm以上、受け皿から白面までの高さ4.5cm、受け皿の深さ1.1cm以上、底部径32.0cm、高さ9.4cm、脚高2.9cmを測る。軸穴は、白面のほぼ中央に穿たれ一辺2.2cmの方形を呈している。白面は軸穴を中心に八分画9～10溝式で、主溝・副溝ともに白面周縁にまで達している。主溝・副溝ともに深くシャープに刻まれている。石材は不明である。72(図18-72)は五輪塔または、宝篋印塔の相輪と思われる。残存高12.2cm、幅7.5cm、厚6.4cm、重量3.1kgある。表面の風化が著しく梵字などが刻まれているかは不明である。石材は不明。

このほか銭7枚、釘1本、キセル1本が出土している（図17-61～69 図版8-3）。このうち66は孔と文字の刻印が45°ずれたイレギュラーな製品である。

表3 遺物計測表

掲載 番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
1	土師器	皿 N	SK59	13.7	(2.1)		25YR7/4 ぶい橙色	体部は緩やかに立ち上がり口縁部は外反する 端部上方にはわずかに丸く肥厚する 胎土密 焼成良好
2	土師器	皿 N	SK60	13.8	(2.3)		5YR7/7 橙色	体部は緩やかに立ち上がり口縁部は外反する 端部上方にはわずかに丸く肥厚する 胎土密 焼成良好
3	土師器	皿 N	SK59	13.9	(2.5)		25YR7/4 ぶい橙色	体部は緩やかに立ち上がり口縁部は外反する 端部は外方に開く 胎土密 焼成良好
4	土師器	皿 N	SK59	13.9	(2.7)		25YR7/4 ぶい橙色	体部は緩やかに立ち上がり口縁部は外反する 端部上方にはわずかに丸く肥厚する 胎土密 焼成良好
5	黒色土器 B	椀	SK59		(4.9)		10YR2/1 黒色	磨減著しいが、外面にヘラミガキ混が認められる
6	須恵器	鉢	SK59		(5.8)		25Y7/1 灰白色	内外面ともに体部から口縁ヨコナデ 胎土密 焼成良
7	緑釉陶器 素地	椀	SK59		(2.6)	6.9	10YR8/2 灰白色	無釉 貼付け高台 胎土密 焼成良好
8	緑釉陶器	皿	SK59		(1.3)	7.7	N7/0 灰白色 軸 7.5Y5/4 明オリーブ色	胎土密 焼成良好
9	灰釉陶器	皿	SK59		(1.8)	6.0	25Y7/1 灰白色 軸 2.5Y7/2 灰黄色	貼付け高台 重ね焼き痕残す 胎土密 焼成良好
10	灰釉陶器	瓶子	SK59		(3.8)		10YR8/2 灰白色 軸オリーブ褐色	胎土密 焼成良好
11	土師器	皿 N	SD69	9.6	(1.9)		7.5YR7/3 ぶい橙色	体部は外報に開き、口縁部は外反気味に立ち上がる 内外面ともに体部から口縁ヨコナデ 底部内面ナデ 外面オサエ 胎土密 焼成良
12	土師器	皿 N	SD69	13.0	(2.7)		2.5YR7/4 ぶい橙色	体部は緩やかに立ち上がり口縁部は外反する 端部上方にはわずかに丸く肥厚する 胎土密 焼成良好
13	土師器	皿 N	SD69	15.0	(2.0)		7.5YR8/4 浅黄橙色	体部は外報に開き、口縁部は外反気味に立ち上がる 内外面ともに体部から口縁ヨコナデ 底部内面ナデ 外面オサエ 胎土密 焼成良
14	緑釉陶器	皿	SD69		(1.9)	6.0	5Y8/1 灰白色 軸 5Y7/4 浅黄褐色	内面陰刻花紋 ケズリ出し高台 底部外面及び見込みにメト残す 胎土密 焼成良好
15	緑釉陶器	皿	SD69		(1.5)	7.8	2.5Y7/2 灰黄色 軸 7.5Y6/1 灰色	ケズリ出し高台 外面高台部まで釉薬かかる 胎土密 焼成良(硬質)
16	須恵器	鉢	SD69	18.4	(2.1)		N7/0 灰白色	細かい砂粒含むが胎土密 焼成良
17	白磁	椀	SD69	15.0	(2.8)		7.5Y8/1 灰白色 軸 N8/0 灰白色	胎土密 焼成良好
18	白磁	椀	SD69		(3.0)		7.5Y8/1 灰白色 軸 N8/0 灰白色	胎土密 焼成良好
19	土師器	皿 Ac	SK66	8.2	1.2		7.5YR7/3 ぶい橙色	口縁部ヨコナデ 体部ナデオサエ 底部内面ナデ 胎土密 焼成
20	土師器	皿 Ac	SK66	9.1	1.1		7.5YR8/4 浅黄橙色	口縁部ヨコナデ 体部ナデオサエ 底部内面ナデ 胎土密 焼成
21	土師器	皿 A	SK66	9.0	1.5		7.5YR7/3 ぶい橙色	内外面ともに体部から口縁ヨコナデ 底部内面ナデ 外面オサエ 胎土密 焼成良
22	土師器	皿 A	SK66	9.8	2.1		10YR8/3 浅黄褐色	体部上半のヨコナデ弱く皿 N に近い口縁部 内外面ともに体部から口縁ヨコナデ 底部内面ナデ 外面オサエ 胎土密 焼成良
23	土師器	皿 A	SK66	10.0	1.3		7.5YR7/4 ぶい橙色	内外面ともに体部から口縁ヨコナデ 底部内面ナデ 外面オサエ 胎土密 焼成良
24	土師器	皿 A	SK66	10.7	1.4		10YR8/3 浅黄褐色	内外面ともに体部から口縁ヨコナデ 底部内面ナデ 外面オサエ 胎土密 焼成良
25	土師器	皿 N	SK66	9.2	1.5		10YR7/3 ぶい黄褐色	内外面ともに体部から口縁ヨコナデ 底部内面ナデ 外面オサエ 胎土密 焼成良
26	土師器	皿 N	SK66	13.6	2.6		7.5YR8/4 浅黄褐色	内外面ともに体部から口縁弱い二段のヨコナデ 底部内面ナデ 外面オサエ 胎土密 焼成良
27	土師器	皿 N	SK66	14.0	(2.2)		10YR8/3 浅黄褐色	内外面ともに体部から口縁弱い二段のヨコナデ 底部内面ナデ 外面オサエ 胎土密 焼成良
28	土師器	皿 N	SK66	14.6	2.3		10YR8/3 浅黄褐色	内外面ともに体部から口縁弱い二段のヨコナデ 底部内面ナデ 外面オサエ 胎土密 焼成良
29	土師器	皿 N	SK66	15.0	2.5		10YR8/3 浅黄褐色	内外面ともに体部から口縁弱い二段のヨコナデ 底部内面ナデ 外面オサエ 胎土密 焼成良
30	土師器	皿 N	SK66	15.2	2.4		10YR8/3 浅黄褐色	内外面ともに体部から口縁弱い二段のヨコナデ 底部内面ナデ 外面オサエ 胎土密 焼成良
31	土師器	皿 N	SK66	15.6	3.3		10YR7/3 ぶい黄褐色	内外面ともに体部から口縁ヨコナデ 底部内面ナデ 外面オサエ 胎土密 焼成良
32	緑釉陶器	椀	SK66		(2.3)	6.6	10YR5/2 灰黄褐色 軸 10Y3/2 オリーブ黒色	胎土密 焼成良好
33	須恵器	杯 B	SK66		(3.6)	13.0	N6/0 灰色	貼付け高台 胎土密 焼成良好
34	白色土器	高坏	SK66		(7.0)		2.5Y8/1 灰白色	胎土密 焼成良好
35	土師器	皿 Sh	SD24	6.3	(1.6)		10YR8/2 灰白色	内外面ともに体部から口縁ヨコナデ 胎土精良 焼成良
36	土師器	皿 Sh	SD24	6.3	1.6		10YR8/2 灰白色	内外面ともに体部から口縁ヨコナデ 底部内面ナデ 底部は内面側に突出する 胎土精良 焼成良
37	土師器	皿 N	SD24	8.0	1.4		10YR8/2 灰白色	内外面ともに体部から口縁ヨコナデ 底部内面ナデ 外面オサエ 胎土密 焼成良
38	土師器	皿 S	SD24	12.0	2.3		7.5YR8/3 浅黄褐色	内外面ともに体部から口縁ヨコナデ 底部内面ナデ 外面オサエ 胎土密 焼成良
39	須恵器	蓋	SD24		(3.2)		N6/0 灰色	混入品 胎土密 焼成良
40	須恵器	鉢	SD24	30.0	(4.6)		N5/0 灰色	胎土密 焼成良
41	須恵器	盤	SD24		(2.2)		5Y6/1 灰色	胎土密 焼成良
42	灰釉陶器	椀	SD24		(2.3)	7.0	N7/0 灰白色	胎土密 焼成良
43	青磁	椀	SD24		(2.5)	4.9	5Y7/1 灰白色 軸 7.5Y6/2 灰オリーブ色	ケズリ出し高台 胎土密 焼成良
44	古瀬戸?	卸目皿	SD24		(1.1)	4.5	2.5Y8/1 灰白色 軸 7.5Y6/2 灰オリーブ色	線刻による卸目 底部は糸切 胎土密 焼成良

掲載番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
45	輸入陶磁器	椀	SD24		(5.0)	5.6	10YR8/3 浅黄橙色 釉 10YR6/4 にぶい黄橙色	線刻による施文後軸葉 見込み中央に刻印? 高さ約1cmのケズリ出し高台 胎土緻密 焼成良
46	焼締陶器	すり鉢	SD24		(9.2)	12.4	2.5Y5/1 黄灰色	胎土には4mm以下の長石・石英・チャート含むが密 焼成良
47	瓦質土器	火鉢	SD24		(7.6)		N3/0 暗灰色	胎土密 焼成良
48	軽石	錘又は浮き	SD24	長(3.6)	幅(3.5)	重さ 8 g	孔の直径(0.4)	穿孔が認められる
49	土師器	皿N	SE1	9.3	1.8		7.5YR8/4 浅黄橙色	口縁外面から底部内面ヨコナデ後ナデ 口縁直下から外面オサエ 胎土密 焼成良
50	土師器	皿S	SE1	12.3	2.1		7.5YR8/4 浅黄橙色	外面口縁直下から体部内面ヨコナデ 底部内面ナデ 外面オサエ 胎土密 焼成良
51	土師器	蓋	SE1	6.8	1.6		5YR7/6 橙色	口縁から内面ヨコナデ 内面ナデ 外面オサエ 胎土密 焼成良
52	土師器	塩壺	SE1	5.0	8.4	3.1	5YR7/6 橙色	内面布目紋痕 口縁部ヨコナデ 体部外面板による圧痕残す ヨコのナデ 底部オサエ 胎土密 焼成良
53	土師器	塩壺	SE1	5.7	9.6	3.6	5YR7/6 橙色	内面布目紋痕 口縁部ヨコナデ 体部外面板による圧痕残す ヨコのナデ 底部オサエ 胎土密 焼成良
54	土師器	蓋?	重機掘削中	5.0	1.7		5YR6/6 橙色	内面布目圧痕 他はナデ 胎土密 焼成良
55	土師器	鉢	重機掘削中	6.2	3.9	8.4	10YR8/3 浅黄橙色	体部ロクロナデ 胎土密 焼成良
56	土師器	皿N	重機掘削中	5.5	1.5		10YR6/3 にぶい黄橙色	口縁外面から底部ナデ 口縁直下から外面オサエ 胎土密 焼成良
57	土師器	皿N	重機掘削中	5.5	1.4		10YR6/3 にぶい黄橙色	口縁外面から底部ナデ 口縁直下から外面オサエ 胎土密 焼成良
58	土師器	皿Sb	重機掘削中	9.0	1.9		10YR8/3 浅黄橙色	内外面ともに体部から口縁ヨコナデ 底部内面ナデ 胎土精良 焼成良
59	瓦	巴紋軒丸	SD24				N5/0 灰色	
60	瓦	唐草文軒平	SK66	長(12.6)	幅(11.4)	瓦当厚 3.7	2.5YR7/1 灰白色～ 7.5YR7/4 にぶい橙色	雲母・チャート東等砂粒含む
61	銭	寛永通寶	2層	長2.6	短2.5	厚0.19	重さ 40 g	
62	銭	〇元〇寶	2層	長(2.4)	短(2.1)	厚0.15	重さ 15 g	
63	銭	天元聖寶	第1面掘下げ	径2.5		厚0.10	重さ 29 g	天聖元年(1023)初鑄
64	銭	聖宋元寶	第1面掘下げ	径2.4		厚0.11	重さ 24 g	建中靖国元年(1101)初鑄
65	銭	皇宗通寶	第1面掘下げ	長2.5	短2.4	厚0.11	重さ 25 g	寶元・康定元年(1038)初鑄
66	銭	寛永通寶	SK34	径2.5		厚0.12	重さ 39 g	
67	銭		SK34	径2.5		厚0.10	重さ 29 g	不明
68	金属製品	キセル	2層	長(5.0)	幅1.1	厚0.6	重さ 3.0 g	銅
69	金属製品	釘	SK34	長(6.8)	幅1.3	厚0.9	重さ 12.9 g	鉄
70	石製品	臼	重機掘削中	径27.4	9.6		重さ 138 kg	花崗岩
71	石製品	茶臼	重機掘削中	摺り面 20.0	9.4	32.0	重さ 6.4 kg	
72	石製品	宝篋印塔頭	重機掘削中	高(12.2)	幅7.5	厚6.4	重さ 7.49 kg	石材不明
73	ガラス製品	丸玉	SD24	径 1.5～1.6			重さ 3.1 g	

第V章 まとめ

西洞院川について これまでの西洞院川に係る発掘調査例では、① 1981年左京八条三坊二町下京区役所建設に先立つ調査^{註4}、② 1982年に行われた左京二条二坊十四町の調査^{註5}、③ 1988年に行われた京都府庁内での調査^{註6}、④・⑤ 2007年に行われた本能寺城に係る2件の調査^{註7・8}。⑥ 2012年に行われた本能寺城の調査^{註9}で確認している。

今回の調査地と同じ左岸に推定できる調査としては、①の八条三坊二町の調査があげられる。検出した西洞院川SD1は幅11m以上、検出面からの深さ約1.8m、現地表からの深さ約4.4mあり、東肩には護岸の痕跡は認められなかった。出土遺物は荷札木簡などの木製品や土器類が出土し、中世末から近世初頭である。ただ調査年度が古く測量基準点が整備される前であったことから座標の記録はなく、肩部の座標値は不明である。

③の府庁内での調査では、SD142が河川に想定され、西洞院大路と近衛大路交差点東側の近衛大路中央付近から始まる平安時代から鎌倉時代の遺物を包含する南北方向の自然流路である。位置的には、西洞院大路東側溝の位置にあたる。

②・④・⑤・⑥は、右岸・西洞院大路西側に位置し、④～⑥は左京四条二坊十五町・本能寺城の東側に推定される調査である。

④の調査は十五町南東部、本能寺南西隅に推定される個所である。西洞院川は16世紀中頃に埋められており、本能寺南限の濠は西洞院川を埋めて造られている。

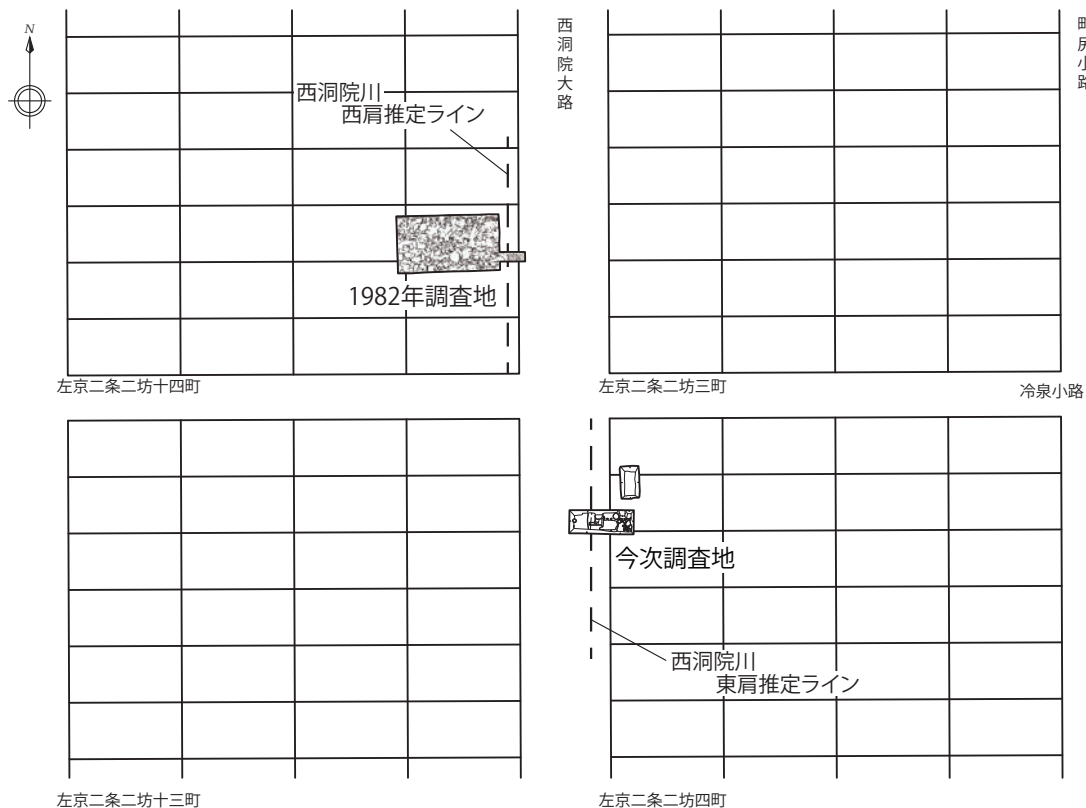


図19 西洞院川の位置 (1 : 2,000)

⑤の調査は十五町の中央やや北側に位置する調査地点である。西洞院川SD22の西肩は平安京条坊の西洞院大路築地推定位置（Y-22,361ライン）を越えて西に広がり、Y-22,364ライン付近で検出される。16世紀中頃には埋められている。

⑥の調査は十五町北東部にあたる。溝411が西洞院川とされ、西肩（ほぼY-22,360ライン）は、16世紀後半には西洞院川を埋めて本能寺の整備を行っている。

このように、左京四条二坊十五町・本能寺城の調査においては室町時代後半から安土桃山時代にかけて西洞院川西側を埋め、本能寺の東側の造成を行っているという状況が明らかとなっている。

②の調査では、既往の調査で記した通り、溝7とした室町時代後半に埋没した遺構を西洞院川に推定している。この調査では、西洞院川肩部を確認するためのサブトレンチでの確認であり詳細は不明であるが、西肩部の座標はY-22,368付近にある。

今回の調査により明らかとなった西洞院川は、護岸とみられる痕跡は確認していない。室町時代後半から江戸時代初期には埋め戻され整地されている。調査地では、江戸時代初期の二条城築城に伴う周辺整備により完全に埋め戻し・整地され、1・2面の建物遺構が成立したと思われる。開削された時期は不明であるが、出土した遺物は平安時代中期からわずかであるが出土している。東肩はY-22,346にあり、既往の調査で確認されている西肩の座標には出入りがあり一概に言えないが、近接する②調査の成果から川幅は22m前後に推定することもできる。

平安時代中期の整地層・遺構について 第3面において土坑SK59・66、溝SD69などを検出し、整地層とみられる土層も確認した。推定築地心の東約1mの地点で確認した南北方向の溝SD69は二条三坊四町の築地内溝に推定することができる。また整地層とみられる黄橙色粘質土・暗褐色泥砂層は固く締まり路面とみることもできる。このことから造営当初は、京程通の造成が調査地周辺でも行われていたことが確認できたといえる。

今回の調査で得られた成果は僅かであるが西洞院川の変遷、平安時代の当該地周辺の様相の一端を明らかにすることができた。これらの調査成果をより充実させるために今後の近隣での調査の積み重ねに期待される。

註

註4 「24 平安京左京八条三坊二町2」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年

註5 注1に同じ

註6 伊野近富「4. 平安京左京（左京近衛西洞院辻）」『京都府遺跡調査概報 第33冊』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989年

註7 平尾正幸「平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡」『京都市埋蔵文化財発掘調査報告 2007-11』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年

註8 吉川義彦「本能寺跡発掘調査報告 平安京左京四条二坊十五町」関西文化財調査会 2008年

註9 家崎孝治「本能寺城跡 - 平安京左京四条二坊十五町一」古代文化財調査会 2012年

附章 京都市内出土資料の分析調査

龍谷大学 北野 信彦

1. はじめに

(株)文化財サービスによる京都市内の発掘調査により出土した2資料の分析調査を行ったので、結果を報告する。

2. 調査対象試料

調査対象資料は、西洞院夷川の旧河床から出土したガラス玉の破片資料1点である。

3. 調査方法

本調査では、滓物質に関する色相や表面状態の観察、非破壊の分析を実施した。以下、調査方法を記す。

3.1 色相や表面状態の観察

調査対象資料の色相や表面状態は、目視観察したのち、(株)ハイロックス社製のVH-7000S型デジタルマイクロスコープを使用して、500倍から1,000倍の高倍率観察を行った。

3.2 無機元素の定性分析

調査対象資料の無機元素の定性分析は、本学の文化財科学研究室設置の据付型蛍光X線分析装置の試料室内で分析することが可能なサイズであるため、(株)堀場製作所MESA-500型の蛍光X線分析装置を使用した。設定条件は、分析時間は600秒、試料室内は真空、X線管電圧は15kVおよび50kV、電流は240 μ Aおよび20 μ A、検出強度は200.0～250.0cpsである。

4. 調査結果

各種の観察および分析調査を行なった結果、以下のような基礎的データの蓄積を得た。

西洞院夷川旧河床出土のガラス玉片資料

① 調査対象資料は、西洞院夷川旧河床から出土しており、南北朝～室町期頃の資料と想定されている。資料の表面は白色物質層で隠蔽されているが、破損箇所からは本来の光沢が良好な透明感がある深緑色のガラス面が目視観察される。資料としては1/2強が残存している半球形であり、破損した平坦面には穿孔溝が確認されるため、中央に紐通しの穿孔を有する球形のガラス玉製品資料である

② 資料表面を隠蔽する白色物質層を拡大観察した結果、マットでタイトな微粒子の白色物質であることが確認された(写真1-1)。そして破断面の状況から、本欄の光沢が良好な透明感がある深緑色のガラス面の上に塗装されたものではなく、このガラス質が風化した風化層であることが確認

された(写真1-2)。通常、ガラス玉資料の表面にみられるこのような白色風化層は、鉛ガラスの鉛成分の風化による酸化鉛層であると考えられている。

③ オリジナルの深緑色ガラス面の中には多数の球状の気泡沸きが観察されたが、いずれも均等な球状を呈しており、ガラス小玉を作成する際の巻き付け成型に伴う気泡の縦伸びは観察されなかった(写真1-2,1-3)。また割れ剥離面は、ガラス製品特有の平滑な凹剥離面が観察された(写真1-4)。そのため、本資料の成型は芯巻き付け成型ではなく、ガラス流し込み成型の固化後に穿孔を行った玉製品であると理解した。

④ 本資料の表面を隠蔽している白色風化層と、破断面から観察されるオリジナルのガラス面をそれぞれの箇所に関する蛍光X線分析した。その結果、いずれの箇所からも、強い鉛(Pb)のピークが検出された(図1-1,1-2)。このことから、本資料は、鉛ガラスであると同定した。

⑤ その一方で、ガラスの色相を獲得するための呈色材料を特定するピークは、わずかにカリウム(K)、鉄(Fe)もしくは銅(Cu)のピークが検出された。通常、鉄(Fe)は黄色もしくは透明感のある飴色系ガラス、銅(Cu)もしくは鉄(Fe)、クロム(Cr)は緑色、銅(Cu)もしくはコバルト(Co)は青色ガラスにみられる呈色材料である。本資料は、拡大観察の結果、艶のある透明感の強いエメラルドグリーンを呈するガラスであることが確認されているが、鉄(Fe)や銅(Cu)をわずかに混和して着色した鉛ガラス製品であると理解した。

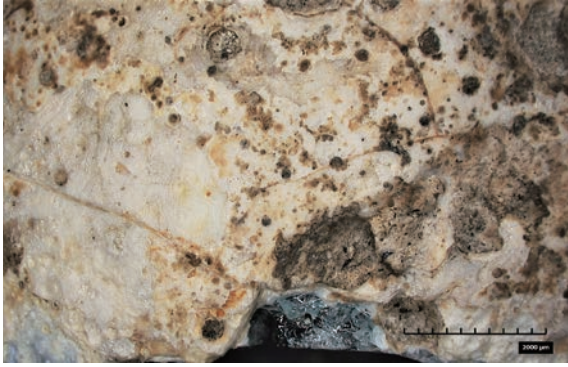


写真 1 - 1 : 白色風化層の拡大観察

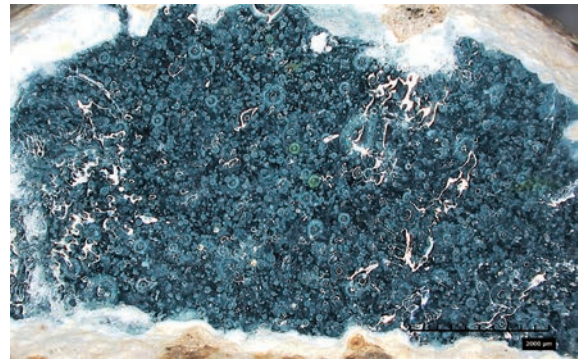


写真 1 - 2 : 破断面からみたガラス層の拡大観察

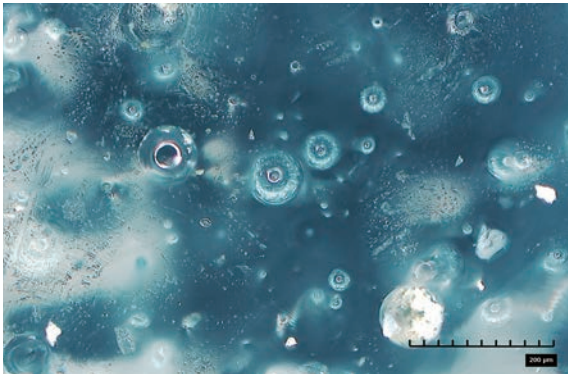


写真 1 - 3 : 球状沸き気泡の拡大観察

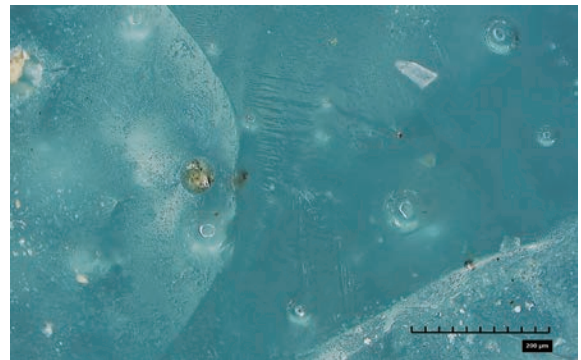


写真 1 - 4 : ガラス破断面の拡大観察

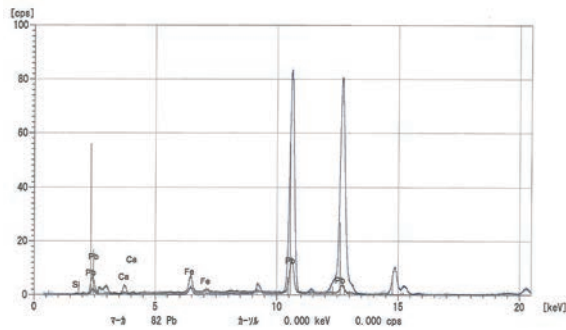


図 1 - 1 : 白色風化層の蛍光X線分析結果

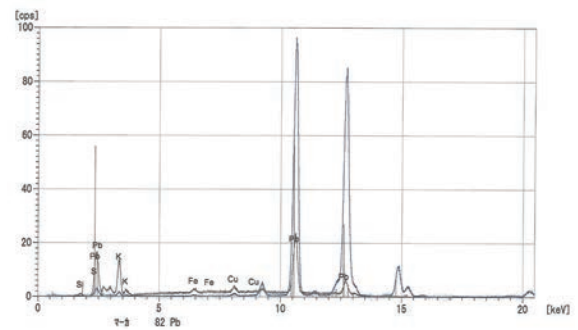


図 1 - 2 : ガラス面の色風化層の蛍光X線分析結果

図 版



1. A区 1面全景（南東から）



2. A区 2面全景（南東から）



3. A区 東壁断面（西から）



1 B区 1面全景 (東から)



2. B区 1面 建物SB72 (東から)



3. B区 1面 防空壕SK36 (東から)



1. B区 2面全景（東から）



2. B区 2面 礎石建物SB73（北から）



1. B区 3面全景（東から）



2. B区 西洞院川SD24南壁（北から）



3. B区 西洞院川SD24西壁（東から）



1. B区 土坑SK66 (北から)



2. B区 溝SD69 (南から)

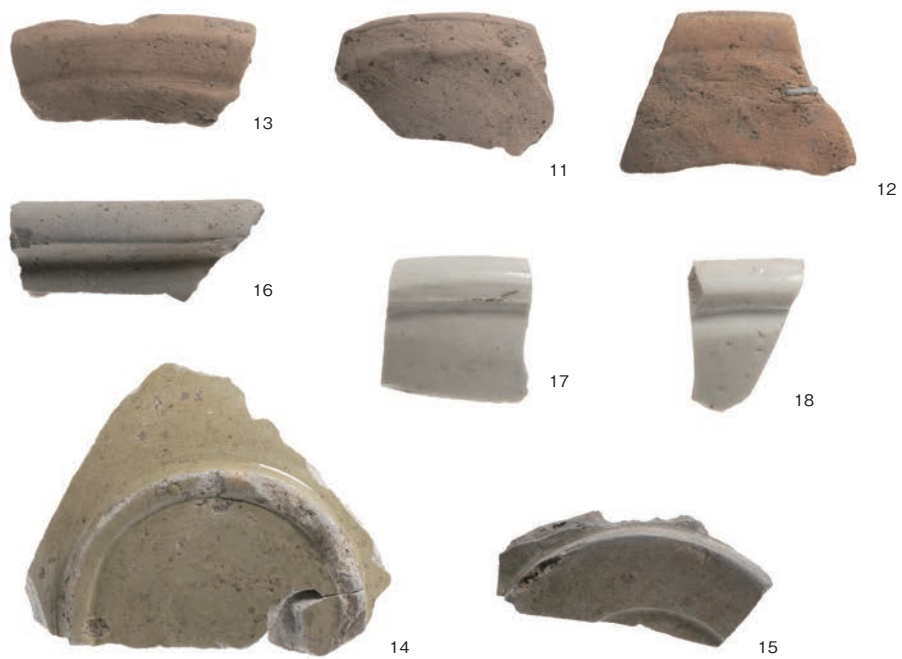


3. B区 土坑SK59 (南から)

图版 6
遺物



1. 土坑SK59



2. 溝SD69



1. 土坑SK66



2. 西洞院川SD24

図版 8
遺物



1. 井戸SE 1 (49~53)

2. 西洞院川SD24 (73)



3. 西洞院川SD24 (59・48) 土坑SK66 (60)



4. 土坑SK34 (66・67)、2層 (61・62)、第1面掘下げ (63・64・65)

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうにじょうさんぽうよんちょうあととはつかつちょうさほうこくしょ							
書名	平安京左京二条三坊四町跡発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	菅田薫							
編集機関	株式会社 文化財サービス							
所在地	〒612-8372 京都市伏見区北端町58							
発行所	株式会社 文化財サービス							
発行年月日	2020年8月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょうにじょうさんぽうよんちょうあと 平安京左京二条三坊四町跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 にしのとういんとおりえびすがわ 西洞院通夷川 さぎやくしちやう 下る薬師町644 えびすがわとおりにしのとういん 夷川通西洞院 ひがしいるいずみちやう 東入泉町 661-3	26100	1	35度 00分 52.6秒	135度 45分 18.5秒	2020年 5月8日 ～ 2020年 6月16日	150.5㎡	宅地開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京二条三坊四町	都城	平安時代中期 ～ 後期	整地層 土坑	土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦など		・西洞院川東側の肩部を検出した。中世末から江戸初期には完全に埋め戻され、秀吉の天正地割から慶長年間の二条城築城に伴う周辺の改造を確認することができた。		
		室町時代 ～ 江戸時代前期	川	土師器、須恵器、瓦質土器、灰釉陶器、古瀬戸、輸入陶磁器、焼締陶器、瓦、石製品、ガラス製品など				
		江戸時代以降	礎石建物	土師器、染付、焼締陶器、瓦、石製品、金属製品など				

平安京左京二条三坊四町跡 発掘調査報告書

発行日 2020年8月31日

株式会社 文化財サービス
編集 〒612-8372 京都市伏見区北端町58
TEL 075-611-5800

三星商事印刷株式会社
印刷 〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る
TEL 075-256-0961